
IS ~ 舞い降りる虚空の使者 ~

KURENAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（舞い降りる虚空の使者）

【Nコード】

N3892Y

【作者名】

KURENAI

【あらすじ】

霊帝“ケイサル・エフェス”との決戦を終え、平行世界の番人として旅立ったクオヴレー・ゴードン。そんな彼が辿りついてのは、女性しか使えない兵器“IS”の存在する世界だった。みなさん本当に申し訳ありません！>（――）<

第一話 プロローグ（前書き）

みなさんお久しぶりです！

みなさんもうお忘れになってると思います！KURENAIです！

このたびは皆さまに大変ご迷惑をおかけしました！本当に申し訳ありません！> (_ _) <

いいわけになりますが、アカウント消したのには少しわけがありまして…。

そのことについては活動報告書に書いておきますので、気になるようでしたら見てください！だれも興味ない！

第一話 プロローグ

何もない虚空のような空間の中、そこでぶつかり合う二つの機体があつた。

一つは黒を基調とし、黄色い翼をはためかす、まるで悪魔を思い出させる機体“デイス・アストラナガン”。そしてもう一つは赤を基調とし、黒い翼を広げる、墮天使を思わせる謎の機体。

「お前は何者だ！」

デイス・アストラナガンの操縦者“クオヴレー・ゴードン”が叫ぶ。だが、答えは沈黙。

(一体、ここは…)

霊帝“ケイサル・エフェス”との決戦を終え、全ての並行世界を守るために旅だつたクオヴレー。自身の使命を果たすため幾度となく戦闘も行ってきた。

異例なのはこの空間である。並行世界から別の並行世界へ転移しようつとした時、この虚空のような何もない空間にたどり着いた。そして現れたのは見た事のない赤い機体。そしてその機体は突然クオヴレーとデイス・アストラナガンに襲いかかってきたのだ。

(この機体は何だ…?)

今限られた状況で現状を把握しようとするクオヴレー。そのクオヴレーの思考に反し、その機体は背中から大剣を引き抜くところらに向かってきた。

それに合わせ、クオヴレーはデイス・アストラナガン唯一の近接武装である大鎌“Z・Oサイズ”を構える。そして翼に緑の粒子をばためかせ、赤い機体に突撃した。

赤い機体はデイス・アストラナガンの動きに合わせて、大剣を振る。クオヴレーはそれを回避し、Z・Oサイズを振り下ろした。

「切り裂け！」

赤い機体はそれを回避、だがクオヴレーはZ・Oサイズをツイン・ラムライフルに換装させ、その引き金を引いた。

「そして、撃ち砕け！」

その瞬間に赤い機体は片手を突きだす。そこから黄色いバリアが出現。直撃を防いだ。

(このままでは、埒があかないか…)

クオヴレーがそう考えている時、赤い機体は腹部の装甲を開放した。

(これは、危険だ…)

今までの経験と、デイス・レヴの反応がクオヴレーにそう告げる。

そしてその開放された腹部から大きな砲筒が姿を現した。

「デイス・レヴよ、その力を解放しろ」

クオヴレーの言葉と共に、デイス・アストラナガンの胸部装甲が開放され、そこに黒紫色のエネルギーが圧縮される。対する赤い機体の腹部の砲筒にも、赤いエネルギーが圧縮されていた。

「テトラクテュス・グラマトン…」

圧縮された黒紫色のエネルギーが大きくなり、迸る青白いプラズマに包まれながら不気味に輝きだした。

「虚無に帰れ！ アイン・ソフ・オウル！ デッド・エンド・シュート！」

そして辺りに黒と青の稲妻が発生、圧縮されたエネルギーが放たれる。

そして赤い機体も、大きな砲筒から圧縮された赤いエネルギー砲を発射させた。

赤と紫、二つのエネルギーがぶつかった瞬間、空間が歪み始め、渦を巻く。

（まずい…！）

ぶつかり合った二つのエネルギーが干渉し合い、そこに赤と紫の混じった大きなワームホールが発生した。

「がああああ！」

そして発生したワームホールは二つの機体を吸い込み、この空間から消滅した。

第一話 プロローグ（後書き）

本当に申し訳ありません、自分の書くような拙い文を読んで下さったみなさまに心からお詫びします。

話の内容は変えるつもりはありません。誤字脱字や矛盾点があれば、どンドン指摘お願いします！アドバイスについても、どんな些細なことでも構いませんので、お願いします！

最後に、こんなバカな奴ですが、これからもよろしくお願いしてくだされば嬉しいです！>（――）<

第二話 舞い降りる虚空の使者（前書き）

もう少ししたら忙しくなるので、投稿が遅くなる可能性があります
！申し訳ありません！

とりあえず2話です！

第二話 舞い降りる虚空の使者

空中に出現するワームホール。そこから吐き出されるように落とされる一つの人影。輝く銀髪の髪にパイロットスーツの男性　ク
オヴレー・ゴードンだ。

（ここはどこだ？）

地に降り立ったクオヴレーは辺りを見渡しそう思う。今立っている場所はグラウンドの上、見えるのは観客席。そこからここが競技場のような場所だということは判断出来た。

（一体俺は…）

そこで先ほどまでのことを振り返るクオヴレー。そこで一番重要なことに気がつく。

（アストラナガンがない）

先ほどまで搭乗していた機体　　デイス・アストラナガンが消えていたのだ。基本冷静な彼も、さすがにこの時は動揺を見せ始める。

そんなクオヴレーの頭の中に直接ノイズが流れてきた。そしてまるで体の中を何か伝達してきているかのような感覚に見合われる。

（なんだこれは…、右腕からか…？）

そして右腕を見る。そこには黒い蝙蝠を思わせる装飾の入ったブレスレットが付けられていた。

(これはアストラナガン!?…だが何故ブレスレットに!?)

クオヴレーはそのブレスレットを見てそう確信する。クオヴレーだからこそ感じることでできる直感だった。そして何故ブレスレットになったのかを分析する。

そんな最中、クオヴレーは人の気配を感じ取った。

(隠れられる場所はないな…)

クオヴレーは万が一に備え、いつでも銃を抜けるように構えて神経を集中させる。ここが軍関係の場所ならいきなり撃たれても仕方がないのだ。

「お前は誰だ？」

現れたのは黒いスーツを纏った黒い髪の女性。対峙しただけで相手のレベルを理解できるだけの経験は積んでいる。その女性ただものではないということはすぐに理解できた。

(やはりここは軍関係の場所か…)

クオヴレーはそう分析するのと同時に、これからどうするのかを考える。だがそんな時、黒い髪の女性は顔色を変える。まるで何かに驚愕するかのよう…。。

(?…どうかしたのか?)

クオヴレーはその女性の視線の先を目で追う。そこにあるのはブレスレットと姿を変えたデイス・アストラナガンだ。

「お前には色々話を聞く必要があるな…」

そう呟き顔を元に戻す。

「ついてこい」

その女性はそれだけを告げ、踵を返す。だがクオヴレーへの警戒は全く怠らない。

(話を聞く…ということは何かあると言うことか…)

このこともよく分からないクオヴレーは、話を聞きたい機会だと思った。むこうがこちらに話がある以上いきなり撃たれたりはしないだろう。

そしてクオヴレーはその女性を見つめる。

(それにしてもなぜあの女はアストラナガンを見て驚いていた？アストラナガンがブレスレットになったのと何か関係があるのか…?)

考えたが答えは出ない。情報が足りなさすぎる。

(ついて行けば分かるか)

クオヴレーはそう思いその女性について行った。

たどり着いたのはどこかの一室。その女性が扉を閉め、クオヴレーに尋ねた。

「色々聞きたいことはあるが…まず名前から聞いておこう。名前は？」

「……クオヴレー・ゴードンです。……あなたは？」

「私は織斑千冬。IS学園の教師をしている」

（なるほど…ここは学園か）

「早速だが本題に入らせてもらおう。そのISについてと、どうやってここに侵入したか教えてもらおう」

（IS?）

聞いたことのない単語にクオヴレーは戸惑った。

「…ISとはなんですか？」

「お前!?! ISを知らないのか!?!」

千冬が驚く。その反応によって、クオヴレーはここでは皆が知っている常識的なものと判断した。

そこから考えられる可能性、それはここが並行世界だということだ。ここが自分の知らない星であるという可能性もあるが、その確率は非常に低い。そのためクオヴレーはそう解釈した。

(話すべきか…)

話さなければ話しは進まないだろう。だが千冬に下手なウソは通じない。だからと言ってありのままを話すわけにはいかない。

冷静に言葉を選び、クオヴレーは言った。

「一つだけ言いたいことがあります」

「何だ？」

「…おそらくここは俺の居た世界とは別の世界です」

「どづいつことだ？」

「俺は突然出現したワームホールに吸い込まれて、気がつけばここに居ました。そしてあなたの口ぶりからしてここではISというのが常識となっています。ですが、俺はISという言葉を一度も聞いたことがありません。おそらくそのワームホールでこの世界に飛ばされたものだと思われます」

千冬は考えた。それならここに侵入した方法、クオヴレーがISについて知らないことについても説明がつく。

雰囲気からクオヴレーがウソを言っていないことも理解できる。だが肝心なところを隠している。それも重大なことを。

「…そのブレスレットは？」

「気がついたら右腕に」

「最後に一つ、お前が隠していることは何だ？」

（見抜かれていた！？）

悟られぬように話したつもりだったクオヴレー。千冬の洞察力に思わず脱帽した。だが、見抜かれたとしても話すわけにはいかない。クオヴレーは千冬の問いに答えた。

「言えません…」

（どうやら本当に言えないようだな…）

千冬はそう判断した。

「いいだろう。お前の言っていることを信じよう。」

それからそう言う千冬。クオヴレーは驚いた。隠していることに答えなかったのに信じると言ったんだ、普通そうなるだろう。理屈で測ることのできない人たちをクオヴレーは知っている。彼女も同種の人間なのだろうか？俺の仲間たちと…。

「どづいことですか？」

「何がだ？」

「俺はあなたの質問に答えられなかった。それにも関わらず信じて？」

「なに、そう深く考えるな。私だって人を見る目はある。お前がウソを言っていないことぐらいわかるさ。それにお前が隠していることが本当に言えないことだということもな」

「……ありがとうございます」

そう言っただけクオヴレーは頭を下げた。

その後クオヴレーはISについての説明とこれからの自分の処遇について聞かされた。

(IS学園か…)

保護という名目でクオヴレーはIS学園に入学することになった。おそらく監視という意味合いもあるだろうが…。

「アストラナガン…一体俺は…」

クオヴレーはブレスレットを見つめ、そう呟く。

俺は何故ここに来たのか？これもアストラナガンの導きなのか？そ

してあの赤い機体は……。それからベッドに横たわり、分厚い参考書を開く。

（今は自分の出来ることをするしかない…か）

それからそのページを一枚一枚捲っていった。

第二話 舞い降りる虚空の使者（後書き）

誤字脱字などがありましたら、よろしくお願ひします！

第三話 IS学園（前書き）

第三話目です！

出来るだけ早く前の状態に追いつこうと思います！

では

第三話 IS学園

「一年一組、ここか…」

クオヴレーは扉の前で教室を確認する。まだ始まってもないが、こういう経験をしたことのないクオヴレーに取っては一つ一つのこと
が新鮮だった。

(それにしても…落ち着かない…)

先ほどから視線が気になってしょうがなかった。まあそれは仕方が
ないことだろう。ISは女性にしか扱えない。IS学園はそのIS
の専門学校だ。ここに男性が、しかも制服姿でいれば、皆視線を注
目させるだろう。

千冬に一人だけ例外がいることは聞いていた。織斑一夏、織斑千冬
の弟である。彼がISを操縦したことは大体的なニュースになって
いるらしい。それに対し、クオヴレーのことはまだ誰にも知らされ
ていないのだ。

それにも関わらず、誰も自分には話しかけてこない。自分のことを
尋ねてこない。聞こえるのは妙な奇声だけ。それにクオヴレーは違
和感があった(実際の所、彼が近寄りがたい雰囲気を出しているの
だが、本人にその自覚はない)。

そして扉を開けるクオヴレー。教室の中の生徒たちの視線が一点に
注目した。

それから流れる沈黙。ほんの数秒だろうが、ジッと見つめられたク

オヴレーにとってはもっと長く感じた。そして…

きゃ…きゃあああぁー！！！！

女性たちから黄色い歓声が上がった。

「ウソ！ 誰あの子！」

「他にも男性のIS操縦者が！？」

「銀髪でクール系！ かつこいい！」

「神さま！ 生まれて初めてあなたに感謝します！」

（またか…）

ここまで来る途中に散々聞いた妙な奇声。クオヴレーは気にせず、自分の席に向かう。だが、その途中で声をかけられた。

「あつと、ちょっと待てくれ」

この“世界の住人”で唯一人、男でISを使える少年。

「いやあ、よかった！ 男子がいてくれて！ 俺は織斑一夏！ よろしく！」

「クオヴレー・ゴードンだ。よろしく頼む」

クオヴレーは微小を浮かべそう答えた。

（俺、織斑一夏は世界でただ一人、男でISが扱える。それで俺は自分以外女しかいないIS学園に通うことになったんだが…）

一夏の席は最前列のしかもまん中。ほぼ全員の生徒の視線を集めていた。

（きつい…きつすぎる！これは何かの罰か神様！）

最初から覚悟していたことだが、その視線は想像以上のものだった。

それから視線を最前列の左端に向ける。そこには黒い髪を後ろで結ったポニーテールの女性がいた。

だがその女性は目が会うとすぐにそっぽを向く。

（なんなんだよ…、一体…）

そんな時、教室の扉が開かれる。入ってきたのは銀髪的美青年。どこか近寄りがたい雰囲気醸し出す“少年”だった。

（！？俺以外に男のIS操縦者！？）

一夏は驚く。それは周りも同じだろう。まるで時が止まったかのよう。皆その一点を見つめ静止していた。

それから…

きゃ…きゃあああぁー!!!

黄色い歓声が起こった。

(すげー美形。あの銀髪って、外国人か?)

その少年が歩き出し自分の目の前を通ろうとする。一夏はその少年を呼びとめた。自分以外のイレギュラーな存在に驚いたが、それ以上男子の生徒がいることが嬉しかった。

「あつと、ちょっと待ってくれ」

その少年は動きを止めこちらを振り向く。

「いやあ、よかった！ 男子がいてくれて！ 俺は織斑一夏！ よろしく！」

「クオヴレー・ゴードンだ。よろしく頼む」

(今笑ったか?)

とりあえず思ったよりも気さくそつで「一夏は安心した。」

(織斑一夏か…)

クオヴレーは一番後ろの右端の席に座り、最前列の真ん中の席を見つめる。はじめてこの学園で声をかけてくれた少年。なんとなくだが、昔の仲間の一人に似ていると感じた。

そんな時、ドアが開かれ、眼鏡をかけた緑色の短い髪の女性が入ってくる。

「皆さん入学おめでとございます。副担任の山田真耶です」

(副担任か…)

どこか抜けている感じがするが、それでもIS学園の教師。実力は高いだろう。そうクオヴレーが分析している中、自己紹介が始まった。

(自己紹介か…、なにかインパクトがあることを言った方がいいのだろうか…?)

ナンバーズに居た影響を受け、そんなことを考えるクオヴレー。そして気がつけば一夏の番までできていた。

「織斑くん！ 織斑くん！」

「は、はい！」

勢いよく一夏が立ちあがる。少し動揺していたことから、一夏も考え事をしていたんだろうとクオヴレーは理解した。

「俺の名前は織斑一夏です。よろしく願います」

そう言つて一夏は席に着こうとする。だが、それを遮るものがあった。それは周りから一夏に集中する期待の眼差し。まるでもつと何か聞きたいと訴えかけているようなそんな状況。

(冷や汗、どうかしたのか?)

この時、クオヴレーは一夏の苦悩など知る余地もなかった。

そして一夏は…

「…以上です」

そう言った。

周りの女子がずっとこけていたが、クオヴレーは何故か分からなかった。

(次は俺の番か…)

「ではクオヴレー・ゴードン君」

「はい」

呼びかけられ、返事をする。それから立ち上がり自己紹介を始めた。

「クオヴレー・ゴードンだ。ゴードンは言われ慣れてないから俺を呼ぶ時はクオヴレーでいい。以上だ」

そう言つてクオヴレーは席についた。女子から何もなかったのはキヤラ的な問題だろう。

そして休み時間。自分の席で座っているクオヴレーに一夏が近づいてきた。

「よう、クオヴレー」

「織斑一夏か」

クオヴレーは一夏を見上げた。

「一夏でいいぜ。男なんて俺たちしかいないんだから、そっちの方が親しみが湧くだろ？」

「そうか…一夏」

クオヴレーが微笑んで言う。それを見ていた女子が何か騒いでいるようだ。クオヴレーと一夏は全く気にしなかった。

「それにしても本当によかったよ。お前がいてくれて。じゃないと俺、孤独な学園生活を送っていたかもしれないからさ」

「孤独…か」

意味ありげにそう言うクオヴレー。かつての自分なら、別に孤独でも構わないと答えただろう。クオヴレーはそう思った。

「だがお前はここの一番前の席の女子…確か篠ノ乃筭だったか…、あの女と知り合いなんだろう？」

「な！？ 何で知ってたんだ！？」

「見れば分かる。お前はちよくちよくあの席に視線を向けていた。だが篠ノ乃は目が合ったたびに目を背けていた。そしてお前が視線を戻すと篠ノ乃もお前に視線を戻していた。そこからお前らが知り合ということとは分かった」

「…よく見てんな」

「一番後ろの席だからな」

「でもそれなら分かるだろう？ あいつは何故か俺のことを嫌ってんだよ」

「あれは素直になれていないだけだ。俺の知り合いにも、そんな不器用な奴がいた」

悟ったように言うクオヴレーだが、彼に限って筭が一夏に好意を寄せていることに気づいたわけではない。好意からではなく友情の一種だと思っていた。

「そうか？」

一夏がそう言った瞬間チャイムが鳴る。

そしてその次の休み時間。一夏と篤が話しあっているのが目に入った。

それから時間は流れ、クオヴレーは自室に戻ってきていた。

(二人用だが…一人部屋か)

いくら保護といっても、素性の分からない自分を誰かと相部屋にしたりはしない。千冬は信じると言ったが、一般的に言えば信じる人間の方が少ない。信用されるほどの時間もたっていないし、信頼されるようなことをしたわけでもない。妥当な判断だと理解し、シャワールームに向かう。

(学生か…)

クオヴレーにとっての初めての学園生活。全てが新鮮なものだったと言える。授業という名のカリキュラム。基本的な時間の流れ。一つ一つが心を満たしていく、そういう感情が沸き起こる。

(俺の新しい仲間たち…。アストラナガン…俺がまだここで笑っていていいというのなら…)

そしてクオヴレーは着替えて床に就いた。

翌日

「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒回の会議や委員会の出席など、まあクラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

一時間目、教壇に立つ千冬がそう言う。すると一人の女生徒が手をあげた。

「はい織斑君を推薦します」

「な!？」

いきなりの言動に驚き、声をあげる一夏。それに抗議しようとした時、別の生徒が手をあげる。

「私はクオヴレー君が良いと思います」

(俺か…)

クオヴレーは特に反応は見せなかったが、別に代表になんて興味が

ない。それに自分に人の上に立つ才能があるとも思えない。クオヴレーは静かに言った。

「俺は断る。一夏でいいだろう」

「クオヴレー！」

一夏が絶叫する。そんな時、クオヴレーの斜め前の席、長い金髪にカチューシャをつけた女性が立ちあがった。

「納得いきませんわ！ そのような選出は認められません！」

（セシリア…オルコットだったか…）

「男がクラス代表だなんて言い恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏はセシリアを軽く睨む。クオヴレーもセシリアの言い分には頭に来ていた。彼女は一夏のことを見下しているのだ。

「だいたい！ クラス代表者は一番強い人になるべきですわ！ イギリスの代表候補生であるこの私こそ一番ふさわしいに決まっています！」

「…傲慢だな」

斜め後ろを振り向くセシリア。そこにはクオヴレーがいた。

「傲慢ですって！」

「お前は自分の実力を過信し過ぎている。そう言う奴ほど戦闘では早く死ぬ。それにお前に代表が務まるとは思えない」

女尊男卑、ISが女性にしか使えないためそうなってしまった社会。だからといって男を見下すような奴にリーダーが務まるはずがない。そうクオヴレーは思った。

(少なくとも俺の知っている人たちは、年齢や性別、国籍や生まれ
た星などで差別はしない…)

クオヴレーはセシリアを睨む。

「お前がなるぐらいなら俺がなった方が良い」

クオヴレーが許せなかったのは彼女が一夏を侮辱したこと。クオヴレーにとって友達、仲間、その絆は何より大切だった。バルマーのクローン人間部隊“ゴラー・ゴレム”のバルシエムとして生まれたクオヴレー。そんな彼を、敵だと分かっても受け入れてくれた人たち。他のものが最初からなかった彼にとって、絆は何よりもかけがえのないものなのだ。

「いいですわ！　そこまで言うのなら、一対一で決着をつけましょ
う」

「…分かった良いだろう」

周りがざわめき出す。いきなりの決闘、しかもイギリスの代表候補生と男性のIS使いの戦い。皆楽しみなのだ。

「千冬姉、止めなくてもいいのかよ」

「織斑先生だ。…まあいいだろう。好きにやらせておけ」

（それに、ゴードンの実力を測るいい機会だ）

「あとお前もクラス代表候補だ。あの二人の決闘が終わったら勝った方とお前が戦うんだぞ」

「げっ！ ウソだろ！」

「ウソについてどうなる」

千冬はそう答え、ドンと机をたたく。

「いいか！ 勝負は次の月曜、第3アリーナで行う。織斑、オルコット、そしてゴードンはそれぞれ準備をしておくように！」

第三話 IS学園（後書き）

とりあえず、だいたいのプロットは残っていたのですぐに投稿することができました！

自分が消した後の続きの話も書いていますので、早く送りつけるように頑張ります！

誤字、脱字などがありましたら、よろしくお願いします！

第四話 デイス・アストラナガンVSブルー・ティアース(前書き)

第四話です！

今日中に第五も載せれるように頑張りたいと思います！

あと、指摘がありました。クオヴレーのISSスーツは一応パイロットスーツという設定です。

第四話 デイス・アストラナガンVSブルー・ティアース

代表決定戦の開催が決まった次の休み時間。千冬は教壇に立ち一度咳ばらいをした。

「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかるぞ」

「へ？」

「予備の機体がない。だから学園で専用機を用意するそうだ」

その瞬間、周りの生徒がどよめき出す。一夏は何の事だかさっぱり分かっていなかった。

「専用機？ 一年のこの時期に？」

「つまりそれって政府から支援が出るってこと？」

「すごいなあ、私も早く専用機ほしいなあ」

（政府からの援助か、予備の機体がないと言っていたが…、データ収集が目的かもしれない…）

クオヴレーは周りの声に耳を立て、そう分析する。そんなクオヴレーにセシリアが近づいて話しかけた。

「一応聞きますが、あなたは専用機を持っていますか？」

「…ああ」

そう答えると、周りの視線が全てクオヴレに向けられる。クオヴレも専用機を持っていたことに驚いたのだろう。

「そうですか。安心しましたわ。わたくしが専用機であなたが訓練機ではフェアではありませんものね」

（やはりオルコットも専用機をもっているか…）

「ま、結果は分かっていますが、せめてわたくしを楽しませてくださいますように」

そう言ってセシリアは自分の席に戻った。

放課後のアリーナ。ここにクオヴレが一人立っていた。一夏は篁と一緒に特訓しているらしい。クオヴレも一夏と一緒に特訓しないかと誘われたがそれは断った。理由は一つ、このISがデイス・アストラナガンだからである。

デイス・アストラナガン、ISとなったためどうなるかは分からないが、もともとは使い方次第で星すら消滅しかねない機体。授業や参考書だけで完璧に扱えるとは思えなかったのだ。

人が近くに居れば巻き添いを食うかもしれない。最初に出会った時

に千冬からデータを取らせると頼まれたが、周りに人がいる中、正しい方を聞いただけで扱っような無謀なまねはしない。適当な理由を託けて断った。

(まずはISに慣れることだな…)

クオヴレーから見てセシリアは脅威とは感じられない。だが、クオヴレーはただ勝つだけではダメだった。ISのシールド・エネルギー、絶対防御というものを信用できないのだ。アストラナガンなら関係なく殺してしまうかもしれない。絶対防御が作用しても重傷を負わせることになるかもしれない。そう思っていた。

(使える武装は限られるか…)

そして何より攻撃に当たるわけにはいかない。当たればデフレクトフィールドが発動する。あれはこの世界では間違いなく未知のものだ。そして万が一機体が損傷すれば、装甲材質に使われているズフィルード・クリスタルが作用し、自動修復してしまう。そんなことになればアストラナガンを回収されかねない。それは万に一つとしても起こしてはならないのだ。

(ベストは出来るだけ攻撃を当てず、且つ一度も攻撃を当たらないで勝つ…か)

それが理想論だと言うことは分かっている。だが理想論が正論となる部隊にクオヴレーはいた。その部隊で成長したクオヴレーが、理想論だから諦めるなんてことはしない。

それから目を閉じ、神経を集中させた。

次の月曜日

「あれがあの子の専用機か…」

第三アリーナのピット内に映されるモニターを眺めてそう呟くクオヴレー。青を基調としたそのIS。武装からして遠距離型であるだろうとクオヴレーは分析していた。

(誰か来たか…)

人の気配を感じとったクオヴレーは振り返る。そこには一夏と箒がいた。

「ようクオヴレー！　大丈夫そうか？」

「俺は平気だ。お前はどうか？」

「俺か…俺はちょっと不安かも…」

(どうかしたのか…?)

そう思うクオヴレー。一夏がこの一週間剣道しかしていないということとは知らない。どうでもいいが。

『ゴードン君！そろそろスタンバイを！』

その時、真耶の放送がピット内に響いた。

「というワケだ。俺は行ってくる」

「おう！勝ってこいよ！」

一夏の言葉にクオヴレーは微笑で返した。それからクオヴレーは箒の方を向いた。

「篠ノ乃。お前はもつと一夏に素直になった方がいい（友情的な意味）」

「な！？なにを急に言っている!？」

箒が顔を赤くして反論する。一夏はどういう事なのか理解できていなかった。

「お前ら二人を見ていたら、なんとなくだが知り合いを思い出す。俺に最も大切なことを教えてくれた俺の親友」

そう言つてクオヴレーは上を見上げる。

「…とこんな話をしている時間はないな」

それから視線を戻すと、目を閉じて呟いた。

「テトラクテュス…グラマトン…」

クオヴレーの体を白い光が包みこむ。そしてその光が消え、そこに立っているのはIS“デイス・アストラナガン”を発動させたクオヴレーだ。

「これが…ISなのか…」

篤が呟く。ISというには余りにも生物的だったのだ。

「一夏…あとでな」

「おっ」

そしてクオヴレーはピット内から外へ飛び出した。

アリーナに現れたクオヴレー。それを見ていた女子生徒が騒ぎだす。

「見て見て！ アレ！」

「あれがクオヴレー君のIS？」

「なんか悪魔みたい」

そしてクオヴレーはセシリアの前まで飛んで行った。

「それがあなたのISかしら？」

「そうだ」

クオヴレーがそう答える。セシリアは余裕綽々といった感じだった。

「ま、何でもいいですわ。何であろうと勝つのはわたくしなのですから」

「セシリア・オルコット、俺は無駄話をするつもりはない」

クオヴレーの言葉にセシリアは頭にきた。

「いいですわ！ ならとつと終わらせて差し上げます！」

その言葉とともにセシリアは右手に取りつけられたライフルを放つ。

（レーザーか…だが！）

「単調な攻撃だ」

クオヴレーはそれを容易に回避。そしてデイス・アストラナガンの黄色い翼をはためかせ、セシリアに突撃する。

「Z・Oサイズ」

その手には携行式のナイフを握られている。

（接近してくる…ですが！）

「遠距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうだなんて…」

(!?)

そこでセシリアの言葉が止まる。クオヴレーが一気に速度を上げたのだ。そしてその速度はセシリアの想像を遥かに凌駕していた。

「斬り裂け」

懐まで潜り込むクオヴレー。その手に握られていたものが気づけば大鎌に変わっていた。

(大鎌!? しかも速い! …ですがこれぐらいなら!)

大鎌のなぎ払いをセシリアは回避する。

(さすがは代表候補生か…、だがこの距離ならば…!)

「逃しはしない」

(!?) ライフル!?)

クオヴレーの手に握られていた大鎌が、今度はラアム・シヨットガンに姿を変えていた。それに寸前で気づいたセシリアだったが、回避するにはすでに遅い。クオヴレーは引き金を引く。

バンツ!

ラアム・シヨットガンから放たれる弾がセシリアに直撃する。

「すごいですよ織斑先生！ ゴードン君が押してます！」

「そうですね…」

二人の戦いをモニターで見る千冬と真耶。千冬から見ても、クオヴレーの戦いはすごいと、いや凄すぎると言えた。

（レベルが違いすぎる。オルコットに勝ち目はない。ISの性能、操縦者としての才能、そしてくぐってきた修羅場の数、それが違いすぎる）

この戦いの観客の中で、一番クオヴレーとデイス・アストラナガンについて理解しているのは彼女だろう。そしてその危険度も。

（あのISのスペックも異常だが、あの武装も異常だ。そして何より、ゴードン、アイツの動きは何だ？ ゴードンの話では、奴がISを所持してからまだ一週間ちよっとしかたっていないはずだ。そんな人間にあんな動きが出来るわけがない。自分の武装を理解しつくしていなければ…そしてそれ相応の場数を踏んでいなければ出来ない芸当だ）

クオヴレーは自分がパイロットであるということは話していない。そのため千冬はもしかしたらクオヴレーはISについて前から知っているんじゃないかと考えた。

だが、その考えは自ら切り捨てる。IS操縦を見て、その操縦者が

どれくらい経験を積んでいるのかを理解するくらい彼女にはわけではない。クオヴレーのレベルは確かに高いが、IS操縦者としてはまだまだ素人、あの動きが出来るほどの場数をISで積んでいたのなら、と考えれば自ずと答えは出るのである。

(ゴードンは別の“何か”で経験を積んでいる。それが何かは分からないが、その経験があるから奴はこの一週間ちよつとであのレベルまでたどり着くことが出来たんだろう…)

モニターを真っ直ぐ見つめ、千冬はそう思った。

「まさかこのわたくしが先手を喰らうとは…、油断しましたわ」

硝煙から抜けだし、セシリアはクオヴレーから距離を取る。

「ですが！ もうあなたにチャンスはありえませんか！」

セシリアがそう言うと、四機のビット型の兵器が姿を現した。

「わたくしのISの名前ともなった武装、“ブルー・ティアーズ”。これからが本番ですわよ！」

四機のブルーティアーズが一斉にクオヴレーに襲い掛かってきた。

だが…

(遅すぎる…)

クオヴレーは放たれるビームを全て回避。そのまま一気のブルー・ティアーズに近づきZ・Oサイズでなぎ払う。だがそれをビットは回避するが…

バンツ！

ラーム・ショットガンが一機のブルー・ティアーズを撃ち落とした。

「な!？」

顔色を変えるセシリア。やっと顔に焦りが見え始める。扱いには絶対の自信のあるブルー・ティアーズがいきなり破壊されたのだ。クオヴレーの強さを理解するには十分であった。

そして残り三機のブルー・ティアーズがクオヴレーに襲い掛かる。

(わたくしは彼を侮っていました。心してかからないとこちらがやられる！)

やみくもに襲いかかるだけだった先ほどとは違い。狙いを定め三機を連携させて来る。

クオヴレーはそのビームの嵐を回避しながらセシリアに言った。

「…残念だがセシリア・オルコット。お前のブルー・ティアーズの弱点は見切っている。お前のブルー・ティアーズはお前が命令を送らなければ動かない。あの時、俺の鎌は避けられたが、ラーム・ショットガンは避けられなかった。それはお前の伝達速度が間に合わ

なかったからだ。そしてもう一つ、お前はこれを使用している時、制御に集中して自身は動くことができない。つまり格好的となる」

「それがどうしたというのですか！ 今あなたがその場を動けない以上関係のないことですよ！」

実際動くことはできる。だがそうすれば被弾してしまう可能性がある。るので動くわけにはいかないのだ。

(ならば…ビットにはビットだ！)

「行け！ ガン・スレイヴ！」

背中から六機の蝙蝠型のビット兵器、“ガン・スレイヴ”が姿を現す。

(ビット兵器！？)

「残念だがオルコット。俺はこれを操りながら自身も動くことができる」

「な！？」

クオヴレーは連携して放ってくるビームを回避しながら、ガン・スレイヴを操りブルー・ティアーズを撃ち落とそうとする。ガン・スレイヴから放たれる非実弾を回避しようと、セシリアはブルー・ティアーズに命令を出そうとする。だが、三機のガン・スレイヴの狙いはセシリアであり、セシリアはそれを回避するため、ビットの制御を放棄してしまった。

バンツ！

三つの場所から生じる爆発。回避に成功したもののブルー・ティアーズは四機とも撃ち落とされた。

「お前の負けだ。諦める」

ガン・スレイヴを戻し、クオヴレーがそう言う。

「何を！ まだわたくしは負けていません！」

再び手に握るライフルでクオヴレーを狙い撃つ。クオヴレーはそれを回避し、セシリアに接近する。

「かかりましたわね！」

クオヴレーが至近距離は近づいてきたのを見計らいそう言う。残りの2機のブルー・ティアーズからミサイルが放たれる。

だがそのミサイルは切り裂かれる。そしてクオヴレーはセシリアの背後にまわりこみ、Z・Oサイズの鎌を首に添えた。

「後一步だったな」

常人なら命中していただろう。だがクオヴレーは常人ではない。コンマ数秒の状況判断など幾度もしてきていたのだ。

誰が見ても一目瞭然な決着。鎌を首に突きつけたその姿は、さながら魂を狩る死神といったところか。

そして…

きゃあああああ！！！！！！

一斉に周りから歓声があふれる。まだセシリアが降参をしたわけではないが、皆勝負が着いたと思ったのだ。

そして…

「……わたくしの…負けですわ…」

セシリアが敗北を宣言した。

「勝ちましたよ！ 織斑先生！」

騒ぐ真耶。千冬は苦い顔をする。

（認めたくないが…天才だあの男は…。ゴードンはISのレベルに自分が着いていけないことを知って、最初から制御して戦闘していた。100の力を30、いや20に…。それですらあれだけの性能が出せるあのISも恐ろしいが、リミッターをかけて戦うのとはわけが違う。出力を抑えるのに集中し、且つオルコットへの集中も全く怠らない。人間の集中力のなせる業か…、聖徳太子じゃあるまいし…。まあ、それは後でいいか…今は…）

「山田先生。少し待っていてください」

そう言って千冬は部屋を出た。

第四話 デイス・アストラナガンVSブルー・ティアース(後書き)

誤字や脱字、矛盾点などがございましたたよろしくお願ひします！

これからもよろしくお願ひします！(^ o ^) /

第五話 代表決定戦、終幕（前書き）

少しおそくなりました！本当に申し訳ありません！

文才皆無な文は相変わらずですが、よろしくお願いします！

第五話 代表決定戦、終幕

「うわぁお…、俺、今からアレと戦うのか…?」

モニターで戦いの一部始終を見ていた一夏がそう呟いた。

「戦う当人がそんな気持ちでどうする!」

「でも…、あれはちよつとな…」

一夏が低い声でそう言う。篝も一夏の気持ちは分かっていた。あの戦いを見て勝ち目があるとは思えないのだ。そのためこれ以上何を言っているのか分からなかった。

と、そんな時…

『織斑君！ 来ました！ 織斑君の専用IS!』

真耶の放送が辺りに響いた。

真耶がちょうどマイクに向かって放送すると、部屋の扉が開かれ、千冬が中に入ってくる。それに気づいた真耶は千冬に尋ねた。

「あ、織斑先生！ どこに行ってらしたんですか!？」

千冬はその問いに何事もなかったかのように答えた。

「少し気になることがありまして」

「気になること？」

「いや、大したことはありません」

大したことではないはずがない。真耶はそれに気づいたが、千冬が言わないということは言えないことであるということ。敢えてその問題をこれ以上言及しなかった。

(不審なものは見当たらなかった…が、油断はできないな…)

そして千冬はモニターに視線を向けた。

「次は一夏か…」

その頃、クオヴレーは戦闘準備をしていた。と、言っても、エネルギーは回復しており、機体チェックも終わっているためすることがないといった状態だ。

「それでも俺は俺の戦いを全うするだけだ」

一夏との戦闘でもセシリアと同じことが言えるのは確かだった。問題は一夏のISの戦闘スタイルが分からないということだ。

警戒はするつもりだが、不意を突かれる攻撃をしてくるかもしれない。先ほどのセシリア戦では、遠距離タイプである彼女のISを見て大体の武装を予想することはできた。もし万が一ビット兵器でこちらの不意を突く攻撃をしても、予想の範疇であるため回避できただろう。

だが、基本ISのことをまだ理解していないクオヴレーにとってこの一夏戦はセシリア戦よりも神経を研ぎ澄ませる戦いになる。ISというのが一体どこまでの戦闘が可能なのか分からないため、ISを見てみなければ攻撃方法の予想をつけることができない。何より政府が援助するぐらいだ、特別な仕様があってもおかしくない。

「それでもやるしかないんだがな」

黒いプレスレットを見つめ、クオヴレーはそう呟いた。

「これが…白式か…」

届けられたIS“白式”を見つめ、一夏がそう呟く。そんな一夏に千冬が言った。

『早くしろ織斑。時間がない』

試合開始までにファーストシフトをすませないといけないことを思い出し、一夏は白式を装着させた。

「一夏！ その、なんて言っているのかは分からないが、やる前から諦めるな！」

箒が一夏に言う。一夏が笑って答えた。

「分かってるよ」

「一夏…」

「俺は間違いなく勝てないし、多分一度も攻撃を当てることがもできないで負ける。でも、やる前から諦めるのはナシだ」

(武装は近接武器が一つ、名前が“雪片弐型”てのは置いといて、
どうにかして接近できれば勝負になるか…)

今の武装でどうやって戦闘するのかを分析する一夏。だが、肝心な接近する方法が見当たらない。

と、そんなことを考えている内に白式の最適化が終了した。

「終わったみたいだな…」

それから一夏は出撃の準備をする。

「箒」

「なんだ？」

「行ってくる」

ハツとした筈、今言っている言葉かどうかは分からないが、筈は伝えたいままを一夏に伝えた。

「……勝つてこい」

「……ああ」

それに一夏はそう答え、アリーナの空に飛び立った。

「始まりましたね」

モニターを見ながらそう言う真耶。そこに映るのは黒いISと白いISを纏い対峙する両者。それはまるで悪魔と天使が対峙しているかのようだった。

「織斑先生。この戦いで織斑君の勝率ってどれくらいだと思います?」

「織斑の勝率は0%だ。なにをしようと勝てはしない」

「…厳しいですね」

「事実だ。この世界、人間が思うほど0%のことはないんだが、こ

ればかりは0%だ」

真耶も聞く前から大体予想の着いていた答えだ。ISの起動が二回目の一夏で勝てる相手ではない。

おまけにクオヴレーに油断や慢心はない。これでは攻撃を与えられるかどうかも疑問である。

(…だが、あいつは全く引いてはいないようだ…)

一夏自身も力の差は分かっている。だが、それでも全く怯んでいない。それに千冬は素直に感心した。

「行くぞ、一夏」

「こい！ クオヴレー！」

二人は言葉を掛け合い、臨戦態勢に入る。そしてクオヴレーが先手を仕掛けた。

(相手の戦法が分からない以上…うかつに近づくわけにはいかないな)

距離を取り、ラアム・シヨットガンで一夏を狙い撃つ。一夏はそれを回避し、こちらに迫って来た。

(迫って来るということは接近戦タイプか…だが)

「まだISには慣れていないみたいだな」

再びクオヴレーは引き金を引く、それを一夏は避けるが…

バンツ！

「ぐわあ！」

二発目のラアム・ショットガンの弾が一夏に直撃する。一度目の射撃を回避した一夏を二発目で狙い撃ったのだ。

「一度避けたからと言って安心するな。追撃はいくらでもできる」

「んなこと言っただって！」

そしてクオヴレーは再び一夏を狙い撃つ。一夏はその弾を回避するも、クオヴレーの射撃は止まらない、連続で一夏を狙い撃った。

連続で降り注ぐ弾丸を全て回避するのは今の一夏では無理であり、徐々にシールドエネルギーを削られていく。

(クソ！ これじゃ近づくことも出来ねえし、やられるのも時間の問題だ)

一夏にとってもこうなることは分かっていた。だが、このままでは終われない…いや終わるわけにはいかない。

(ここで終わったら…千冬ねえに恥をかかしちまう)

そしてある決心をした。

(こつなりゃ！ 玉碎覚悟だ！)

被弾覚悟で一夏はクオヴレーに突っ込んでくる。残りのシールド・エネルギーはあと僅か。これ以上は無理だと悟った一夏は白式の唯一の装備である近接特化ブレード 雪片式型を握りしめる。

(あれが白式の装備か…)

エネルギーを圧縮して作られたかのような刀身を持つ刀。クオヴレーは一瞬でそれがただの剣ではないことを見極める。

「届けー！」

一夏は雪片式型をクオヴレーに振り下ろす。だが…

「残念だが、それでは俺は捕えられない」

それは空を切る。そしてクオヴレーはラாம்・ショットガンの引き金を引く。

「まだまだ！」

(！？)

一夏はそれを回避し、クオヴレーに切りかかった。

クオヴレーは瞬時に武装をZ・Oサイズに換装、雪片式型を受け止

める。

「お前が言ったことだぜ！ 追撃はいくらでもできるって！」

（一夏…！）

クオヴレーにとって、一夏の行動は想定範囲内ではあったが予想外のものであった。あのラム・ショットガンで勝ったと思いついていたのだ。同時に万が一に備え、Z・Oサイズで受け止める心構えもしていた。もしそうしていなければ、喰らっていた可能性だってある。

（万が一に備えていたよかったな…）

歴戦の勇者たちとの戦闘。その経験がクオヴレーにその選択肢をさせた。それなりの修羅場をくぐってきた者たちならこのぐらいの反応は出来る。一夏を歴戦の勇者と呼ぶには経験が足りなさすぎるが、あらかじめクオヴレーが回避すると読んでいれば十分可能な芸当である。

そしてクオヴレー自身も、IS経験はまだほとんどないが、戦闘経験で言えば歴戦の勇者だ。相手の攻撃を防いで終わりにするハズがない。

「行くぞ。一夏」

クオヴレーがそう言うと、肩から六機のビット兵器、ガン・スレイヴが姿を現す。

「やばい…」

そして、六機のビット兵器が一斉に一夏を狙い撃つ。一夏は縦横無尽に降り注ぐ非実弾を回避しながら、クオヴレーから距離を取ろうとする。クオヴレーがビットを扱いながら自身も自由自在に動けることは先ほどのセシリア戦で証明済み、近距離に居てはZ・Oサイズで迎撃される。だが…

「もらった」

「しまった！」

バンツッ！

クオヴレーのラアム・ショットガンの弾が直撃した。

ブーン！

『試合終了。勝者クオヴレー・ゴードン』

白式のシールドエネルギーがつき、試合終了を告げるコールが鳴った。

「はあ、やっぱり負けたか…。にしてもやっぱり強いなクオヴレー」

「いや、それはこちらのセリフだ。お前があの時回避したのには少し驚いた」

戦闘を終え、ピット内で言葉を掛け合う二人。

そんな時、背後から千冬と真耶がこっちに近づいてきた。

「二人とも、お疲れ様です」

「織斑先生！ 山田先生！」

真耶は一夏のもとに、そして千冬はクオヴレーのもとに向かってきた。

「織斑先生どうかしたんですか？」

クオヴレーが尋ねる。千冬はクオヴレーの耳元でボソッと要件を呟いた。

「話がある。あとで私の所へ来い」

そして千冬も一夏のもとへ向かって行った。

千冬と真耶が一夏のIS“白式”の詳しい説明を終え、一行は解散

と言うことになった。

そしてクオヴレーは千冬の待つ部屋に向かう。

(話しというのはなんだ？ アストラナガンのことか？ いや考え過ぎだな…)

そしてクオヴレーは千冬の部屋の扉をノックした。

「来たか…、入れ！」

「失礼します…」

そしてクオヴレーは扉を開け、中に入った。

「要件は何ですか？」

「色々聞きたいことはあるが…、どうせそれはお前の答えられない部類に入ってるものだろう。だからそれは聞かんが…そのISは渡してもらおう」

(！?)

クオヴレーにとってもっとも避けなければならないこと、それを千冬が口にした。

「何故ですか？」

動揺を隠し、冷静を装ってそう尋ねた。

「お前のISを調べるためだ。そのISのスペックは明らかに異常だからな。それにリミッターもかける必要がある。そうすればお前も出力を気にせず扱うことができる。お前にとっても悪い話じゃないはずだ」

（見抜かれている！？）

ばれないように戦闘していたつもりだった。だが見抜かれている。クオヴレーは再び千冬の洞察力に脱帽した。

そしてクオヴレーは冷静にこの言葉の奥にひそめられた感情を読み取った。

（守るためか…）

データーを取ることによって何が危険なのか理解すること、リミッターをかけて制御のミスを起こさないようにすること。全ては守るためだ。それを分かっているためクオヴレー自身、拒絶することができなかった。

「一体どれくらいで返ってきますか…？」

「それは私には分からん…。が、近いうちには返そう」

「あと、ひとつ。聞いてもいいですか…？」

拒絶はしないが一つだけ気になることがある。クオヴレーはそれを尋ねた。

「何故、一夏との戦いを中止しなかったんですか？」

これはクオヴレーが先ほど考え過ぎだと導いた要因に当たる部分。もしデイス・アストラナガンの危険さが理解されていたのなら、あの戦いを中止するのが普通だ。

「答えは二つ。一つはお前とオルコット戦を見て万が一は起こり得ないということは分かっていたからだ。そしてもう一つ、あの戦いを中止すれば、何故中止にしたのかという問題になる。あのISについては私も絡んでいるが、上の人間が絡んでいるのも事実。分かるだろ？ そういう不審な点は見当たらなかったが、お前のことを知らなければ私じゃ庇いきれんということだ」

クオヴレーは理解した。ハタから見れば凄いISだが、試合を中止してしまえば危険なISということになるのだ。自分のことを知られればここに居られなくなるかもしれない。出鱈目な理由を挙げて試合を中止したところでリスクを増やすだけ。これはクオヴレーにとっては一番ベストな選択だったのである。だが…

「何故だ…」

何故そこまでしてくれる？そこまで考えてくれる？それが分からなかった。千冬がどういう人間なのか。少なくとも初めて出会ったあの時だけで理解できたのは理屈じゃ測れない人間、見た目や雰囲気以上に優しい人間だという事だけだ。ナンバーズで過ごし、人を信じることを知ったクオヴレー。千冬を疑っているわけではない。だが、ここまで自分のためになってくれる理由を知らなくてはならないと思った。

「何故？」

「危険だと分かっただけで何故そこまでしてくれる。俺とお前は会ってまだ一週間と少ししかたっていない。おまけに俺は素性不明な人間だ。そこまでされるいわれはない。やりようによっては俺のISを回収し俺を学園から追い出すということもできるはずだ」

それに千冬は呆れた口調で答えた。

「なんだお前は、そんなに出て行きたいのか？」

「違う！　が、何のためにそこまでしてくれるかを聞いている」

千冬は一回溜息を吐いて言った。

「確かにお前にとってはそんなことをされる謂れのないことかもしれない。だが、どういう形であれ、私はお前の担任だ。お前が出て行きたいのならないが…、お前が…生徒がここに居たいと思っているなら、それを守るのも役目だと思っている」

「役目…」

「つまりだ、お前がここに居たいのかのなら居ればいい。居たくないのならどこへでも行けばいい。どっちだ？」

こういうことが前にもあった。クオヴレーが敵側の人間であると知られて時、ここに居たいかどうかを問われて時。

「…俺は…ここに居たい…」

「そっか、なら居ればいい」

そう言って千冬はカップに注がれたコーヒーを口にした。

(俺はやはり運がいいのかもれない…、俺の巡り合いは…)

今は込み上げてくる嬉しさを実感したい。そう思った。

「あと、だ。今回は多めに見てやるが次からは敬語を使え」

無意識のうちに普段語を使っていることにクオヴレー気づいた。

「わかりました」

頬笑みながらそう言った。今のクオヴレーにとって、何よりも心を占める感情が表に出たかのような笑みだった。

「なんだゴードン。そういう顔も出来たのか…」

「人をロボットみたいに言わないでください。…それに、先生も見かけによらず優しい方です」

(な!?! 私か優しい?)

そんなことを言われるとは思っていなかった。というより異性からそんなことを言われること自体ない。

「と、とにかく。話しはもう終わりだ」

(何をそんなに動揺している…?)

優しいと言われたことがちょっと嬉しい千冬だった。

第五話 代表決定戦、終幕（後書き）

相変わらず、一夏戦が…

書きなおすも、やっぱり最初がiiiって感じになって結局そのま
まです。最後の蛇足もそのまんま…

ま、それはさておき おいっ！

誤字脱字や、矛盾点があればよろしくお願いします！

次こそは今日日中に投稿する予定です！

第六話 中国からの転校生（前書き）

遅くなって申し分ありません！

プロット保存していると思ったら、なんか半分プロット消えてて…

次の投稿分は問題ないので、速く更新できると思います！

第六話 中国からの転校生

クラス代表決定戦終了の翌日、食堂でクラス代表就任のパーティが開かれた。

“クオヴレー・ゴードン”ではなく“織斑一夏”のである。

「ちょっと待て！ どういうことだ！」

一夏が叫ぶ。それから自分の右隣に座るクオヴレーに視線を向けた。

「俺は代表が務まる様な人間ではない。だから辞退した」

「でも勝ったのお前だろ？」

「強さと統率力は別だ。俺はリーダーには向いていない」

きっぱりとクオヴレーがそう言ったため、一夏の視線がセシリアに向けられる。

「ならセシリアは！？ クオヴレーには負けてけどお」「わたくしも辞退しましたわ」「…はあ！？」

（何で辞退したんだ？ あれだけ男が代表になるの嫌がってたのに…）

一夏は不思議に思った。

「何で辞退したんだよ？」

「それはクオヴ…じゃなくて、わたくしも一夏さんが代表にふさわしいと思ひましてので」

(どこをどう見たらそう思うんだよ!? て、いつか今クオヴレーって言おうとしたよな?)

一夏が疑問に持つ。セシリアが本当に辞退した理由はクオヴレーに頼まれたからだった。

(あれは、ゴードンさん…)

朝、登校中のセシリアの視線にクオヴレーの姿が目に入った。

(誰かを待っているのでしょうか?)

そう思うセシリア。だが同時に、昨日の敗北を思い出し目を背ける。あれだけの啖呵を切って、結果は圧倒的な敗北。おまけに最後は自分で負けを宣言。そのため自分が恥ずかしかつたのだ。

だがそれ以外にも二つの感情が、セシリアの心を占めていた。

それは憧れと恐怖。

圧倒的な敗北の中、こんな風にISを使えるようになりたい、そう思った。だがそれと同時に、その圧倒的な力に恐怖心を抱いた。

セシリアはこのまま通りすぎようと心に決める。だが…

「オルコット」

セシリアはクオヴレーに呼び止められる。自らの中に渦巻く色々な感情により、セシリアは一体どういう風に接すればいいのか分からなくなる。

「ゴードンさん、一体どうかしましたの？」

とりあえず平静を装いセシリアは対処した。

「お前に頼みがある」

「頼み…ですか」

「ああ。俺は代表を辞退する。そうなれば一夏とお前のどちらが代表になるか決めなくてはならない。だからお前も辞退してくれないか？」

「つまり、わたくしよりも一夏さんの方が代表にふさわしいと？」

「それもあるが、俺は一夏に代表になってもらいたい」

「……………」

「アイツはなんというか、リーダーの才能を持っていると俺は思う。それに代表になれば戦闘経験も増える。クラス対抗戦もあるしな。そうすればアイツはもっと強くなる」

「……わかりましたわ」

「！？ 随分とアツサリだな」

「わたくしはあなたに負けた身、それぐらい聞いて差し上げます」

「…あと、もう一つ頼みがある」

「なんですの？」

「一夏を鍛えて欲しい」

「！？ どういうことですか？ あなたは？」

セシリアの疑問は正しい。クオヴレーは自分に勝つたのだ。それなら頼むよりも自分でやった方が良いはずだ。

「正確に言えば手伝ってもらおう形だ。俺よりもお前の方がISについては詳しいからな。俺が教えられるのは戦闘方法だけだ。ISの根本的なことを教えるならお前の方が適任だ。それに…」

「それに？」

「お前には自分の目で一夏を判断して欲しい。女尊男卑がこの世界の社会らしいが、それは所詮言葉だ。俺は自分の目で少しずつ知っていくのも悪くないと思う」

見て知る大切を教えてくれた人たち。時にはそれが情報を上回るといことを知ることができた。それを自分も誰かに教えられることがで

きるのなら、クオヴレーはそう思った。

（見て知る…ですか。確かにわたくしは男性が劣り女性が優れていると、決めつけてましたわね）

「…分かりましたわ！ このわたくしが一夏さんを強くして見せませす！」

（それにクオヴレーさんのことも決めつけてました…）

「オルコット、ありがとう」

「いえ。あとわたくしのごことはセシリアでいいですわ」

「…わかった、セシリア」

そう言つてクオヴレーは学園に向かった。

（わたくしのこの恐怖心は早計過ぎたかも知れませんが…、クオヴレーさんの優しさは本物ですわね…）

遠ざかるクオヴレーを見つめ、セシリアはそう思った。

そして現在に戻り、セシリアは一夏に自分が鍛えるのだと告げる。
すると…

「必要ない！ 一夏には私が教える！」

一夏の左隣に座る箒がそう宣言した。

「じゃあ、一緒に指導すればいい」

それを聞いたクオヴレーがそう言う。その時何故か箒に睨まれた。

一体なんなんだ？クオヴレーと一夏はわけが分からなかったが、理由の分かったセシリアは箒の耳元で囁いた。

「安心していいですわよ箒さん。わたくし、別に一夏さんにはそういった感情は抱いておりませんから」

そう言われてしびしび了承する箒。セシリアにその気がないことは安心できたが、箒自身一夏と二人っきりでやりたかった。

と、そんな言い争いの中、一夏はあることに気がついた。

「ん？ そういやクオヴレーはどうするんだ？」

この中で一番強いのは間違いなくクオヴレーである。一夏自身もクオヴレーに教わるのが一番良いと思った。

「ISについては俺よりもこの二人の方が詳しい。戦闘方法を教えてやることはできるが、ISについて教えてやることはできない。だから俺が担当するのは戦闘面と言っことになる」

その説明に一夏は納得するが…

「クオヴレーってIS使えるようになってどれくらいなんだ？」

『ISについては俺よりも二人の方が詳しい』そう言ったことに違和感を感じたため尋ねる。それに対してクオヴレーは…

「だいたい一週間だ」

改めてクオヴレーの凄さを実感した。

そしてその翌日、クオヴレーは千冬に呼びだされる。クオヴレーも要件は分かっていた。

「もう終わったんですか？」

「ああ」

千冬はそう答える。だが若干浮かない顔だった。

そして脳裏に昨日の記憶が過る。

『すまん山田先生、それでこのISは？』

『えっと、その…』

『？ どうか？』

『分からなかつたんです』

『分からない？』

『装甲材質、武装は全て不明。他を調べようとするればシステムがシ
ョートしてしまいます』

『……………』

『一体、何なんでしょう…』

「？　どうかしたんですか織斑先生？」

「あ、いやなんでもない」

（異世界の物質か…）

クオヴレーが異世界から来た事、千冬はそれを思い出していた。

「リミッターはお前の現時点のIS操縦に合わせてかけた。今のと
ころ出力を30%にまで落としている」

そしてクオヴレーは千冬から黒いブレスレットを受け取る。

「ありがとうございます」

それから一年一組の教室に戻ったクオヴレー。そこでは今とある話題で騒がれていた。

それは2組の中国からの転校生のことである。

この時期に転校してきた事も不思議だが、その生徒は転入早々2組の新しいクラス代表になっただけらしい。

その生徒がそれだけの實力を持っているという事、クラス対抗戦で一組と戦う可能性があるという事、注目せざるを得ない。

「クオヴレー君はどう思う？ 二組の転校生？」

一人の生徒がクオヴレーに尋ねた。

「見てみなければ、分からないな」

「だよな。一体どういう奴だろ？ 強いのかな？」

「今のところ専用機を持つてるのって一組と四組だけだから余裕だよ」

クオヴレーの言葉に同調する一夏に一人の生徒がそう言う。ちょうどその時、意もせぬところから声が聞こえてきた。

「その情報古いよ」

教室の生徒が一斉に扉の方へ視線を向ける。そこに立っているのは茶色の髪をツインテールにした小柄な少女。その少女は言葉を続けた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないから」

誰だ？皆が首を傾げる。だが、ただ一人、その少女を知っている人物がここにいた。

「鈴？ お前鈴か!?!」

(一夏の知り合いか…?)

「そうよ！ 中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音！ 今日には戦線布告に来たつてわけ！」

一夏を指差しそう宣言する鈴。それと同時に生徒たちがざわめきだした。

「アレが2組の転校生？」

「中国の代表候補生…」

その空気も気にせず、一夏は鈴に言った。

「鈴、なにかっこつけてるんだ？ すっげえ似合わないぞ？」

「な、なんてこと言うのよ！ あんたは！」

一夏に怒鳴る鈴。この時鈴は背後から近づいてくる黒いスーツの女性の存在に気がつかなかった。

そして…

ゴツン

「いったあ」

後ろの女性が鈴の頭に拳骨を落とす。鈴は怒り、振り返りながら怒鳴った。

「何すんの！」

そして振り向いた矢先、絶句する。そこにいたのは千冬であった。

「もうSHRの時間だぞ」

「ち、千冬さん」

必要以上に畏縮する態度を取る鈴。それを見て、鈴が千冬を苦手としている事をクオヴレ―は理解した。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

「すみません…」

鈴はそう言うと、一夏に視線を向けた。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ一夏！」

フンッと踵を返し、鈴は2組の教室に戻っていった。

「あいつが代表候補生…」

（騒がしくなりそうだな…）

新しい波乱を呼ぶ出会いであった。

第六話 中国からの転校生（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたらよろしくお願いします！

次回こそは今日中に投稿します！三度目の正直です！

次回もよろしくお願いします！

第七話 クラス対抗戦へ（前書き）

三度目の正直です！投稿できました！（＾Ｏ＾）ノ

文才がないのは相変わらずですが…

では

第七話 クラス対抗戦へ

食堂の一角。今そこにはクオヴレー、一夏、箒、セシリア、そして鈴が座っていた。

「一夏、そろそろ誰なのか説明して欲しいのだが」

箒が鈴と一夏を見回し、不機嫌そうな声でそう言う。他の席に座っている人たちもそれには興味があるらしく聞く耳を立てている。

「ただの幼馴染みだよ」

「ム…」

少し唸って一夏を睨む鈴。クオヴレーは、何故アイツは一夏を睨んでるんだ？と不思議に思った。

そしてそれは一夏も同じで、一夏は鈴に尋ねた。

「どうかしたか？ 鈴？」

「何でもないわよ！」

そう言っただけ鈴は一夏から視線を反す。

そして自分以外に幼馴染がいることに驚いた箒は、呆気にとられた声で呟いた。

「幼馴染み…」

それを聞いた一夏は、思い出したように言った。

「ああ、そうか。ちょうどお前とは入れ違いに転校して来たんだっけな。こいつは篠ノ乃箒、前に話しただろ？ 箒はファースト幼馴染みで、お前はセカンド幼馴染みと言った所だ」

「ファースト…」

何か余韻に浸っているかのように呟く箒。鈴はそんな箒に対抗意識を持った声で言った。

「はじめまして。これからよろしくね」

「ああ」

それから鈴は視線をクオヴレーに向けた。

「こっちの彼は？ ニュースとかになつてないけど、ここの生徒ってことはISが使えるってことでしょ？」

一夏に当てたその質問に、クオヴレー自身が答えた。

「ああ、俺の名前はクオヴレー・ゴードン。呼ぶときはクオヴレーで構わない。よろしく頼む風」

「こっちこそね、あと私のことは鈴でいいわ。」

「そうか、なら鈴と呼ばせてもらおう」

そう言いあっている時、セシリアが二人の会話に割り込んできた。

「わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。あなたは2組のクラス代表らしいですが、言っておきますけど一夏さんを侮ったらタダではすみませんわよ！ 何せこのわたくしとクオヴレーさんがきょ「セシリア、誰も聞いてないぞ」…なんですって！」

クオヴレーに言われ、セシリアは鈴を睨む。鈴はセシリアを無視して一夏と会話していた。

「……だからさ、私がISの操縦みてあげよっか」

「ああ、それは助かる！」

無視され続けたセシリアは怒りを露わにし言った。

「ちよつと聞いていらっしやるの！」

「ごめん。私興味ないから」

鈴がそう言い終えると、箒は机をたたいて身を乗り出す。

「一夏を教えるのは私たちだ！」

「それに2組の代表に教えてもらってはこちらの手の内を晒すようなものだ。そんなことをすればクラス代表戦でこちらが不利になる」

クオヴレーもそれに便乗する。最も二人の根本的な目的は徹底的に違うのだが。

それでも、クオヴレーの言っていることは正論であるため、鈴は口ごもってしまう。

そして授業の予鈴が鳴り響いた。

「と、とりあえず！ そっちの練習が終わった時ぐらいには行くからね！ 時間あけといてよ！」

そう言っつて鈴は帰って行った。

放課後

訓練用に借りた小さなアリーナの上空。そこでぶつかり合う二つの閃光。デイス・アストラナガンを起動させ、Z・Oサイズを握るクオヴレーと、白式を起動させ、雪片式型を握る一夏だ。

「行け！ ガン・スレイヴ！」

クオヴレーは叫び、ガン・スレイヴを出撃させ一夏を迎撃する。

「五感を研ぎ澄ませる一夏。自分という存在を鈍らせるな」

「お前は言っつてることが難しすぎるんだよ！」

と、言いながらも、一夏は六機のガン・スレイヴによりオールレンジ攻撃をきっちり回避していた。

それを下で見ていた篤とセシリアは素直に感心していた。

「一夏…」

「すごいですわね…。一夏さん…」

ついこの間ISを起動させた人間とは思えない。いくら機体のスペックが高くても、それを使いこなすにはそれ相応の技量が必要である。一夏がもう使いこなしているかは別だが、この非実弾の嵐を回避しているのは事実である。

(クオヴレーさんの言っていた意味…、分かった気がしますわ)

セシリアが思い出したのは、クオヴレーの「アイツはもっと強くなる」と言う言葉だ。

はつきり言って、デイス・アストラナガンのビット兵器“ガン・スレイヴ”は、“ブルー・ティアーズ”よりも機動力が遙かに上であり、弾の速さも段違い、なにより命中精度が違いすぎる。率直の感想、ビット兵器を扱う自分でも一分たたずに被弾してしまうだろう。まだ一夏が回避を始めて十数秒程度しかたっていないが、それでも凄いことである。ISを使い始めた時の自分なら数秒で被弾してしまっていた。セシリアは一夏の才能を高く評価した。

と、言っても一夏が素人であることに変わりはない。そのすぐ後に非実弾が直撃、それからなだれ込むように連続で撃ち込まれていっ

た。

「はあはあはあ……」

息を切らし地に降りる一夏。それに対しクオヴレーは息一つ乱した様子はない。

「いいか一夏。直撃を喰らっても絶対に止まるな。的になるだけだ。すぐに態勢を整えろ」

「んなこと言っただって……！ 大体クオヴレー。お前前に戦った時よりも動きが鋭くなってないか？」

「それは私も思った。前から動きにムラがあったわけではないが……クオヴレーがその疑問に答えた。

「ああ、リミッターを掛けたからな」

「……は！？」

三人の声が見事にシンクロする。リミッター、まさかそんなものがついているのか！？そう思った。

「ちょ！ リミッターって！ 制限掛けてアレかよ！？」

「ちょっと待て！　そもそもリミッターを掛けて何故動きが鋭くなる！」

「そうですわ！　おかしいですわ！」

各々が言葉をぶつける。完全に冷静さを失っていた。

それに対し、クオヴレーは冷静さを欠くことなく言葉を返す。

「俺のISは強力すぎるからな、出力を制御しないと自分がついていけない。だから一夏とセシリアとの戦闘の時は出力を制御しながら戦っていた。だが、リミッターを掛ければ制御に集中する必要がなくなる。だから俺の動きが鋭くなったんだらう」

理屈は分かるため、一夏たちも理解することはできた。だが納得できるかと言われれば別である。驚いたで済ましていい領域の話ではないのだ。クオヴレーはISの出力を制御しながら自分たちと戦っていたということになるのだ。それも初めて一週間ちょっとで。

（確かに凄イとは思ってたけど…）

「どうかしたのか？」

「いや、なんでもねえよ」

そう答え、訓練を再開した。

それから暫くし、一夏は箒とセシリアによりISについての専門的な訓練に入った。

そしてクオヴレーはというと…

「鈴…お前は何をしているんだ」

鈴に話しかけていた。

戦闘訓練を終えたクオヴレーは、一夏の訓練をこっそりと覗いている鈴に気がつく。鈴もクオヴレーと目が合い、気づかれたかも思っ
て帰ろうとするが、その途中で追いかけてきたクオヴレーに呼び止められてしまったのだ。

「え、えつと…それは…」

鈴は視線を斜め上に漂わせた。

「…一夏か？」

「え！？ ちょ！？ なんでよ！？」

顔を真っ赤にさせる鈴。クオヴレーは自分が言ったことが凶星だと言っ
ることに気づいた。

「凶星か…、お前も一夏のこと好きなんだな」

「は、はあ！？ 何言つてのよ！？」

「！？ 何故そんなに怒る？」

「あんたがストレートに言いすぎなのよ！」

(なるほど、照れ隠しか…)

クオヴレーは鈴の一種の照れ隠しだと言うことに気がついた。

「そうか。それは悪かった。だが、一夏が好きなことをそんなに照れる必要はないと思う。俺も一夏のことには好きだからな」

そして鈴もやつとクオヴレーの言っていることの本当の意味を理解した。

「はあ、あんたも一夏クラスの鈍感ね」

(！？ 俺が…鈍感？)

たまに言われることがあるが、何故かは未だに分かっていなかった。

「それよりも、お前はいいのか？ 一夏に用があつたんじゃないのか？」

「…今はいいの。だって…」

(二人つきりで話がしたいもん…)

鈴はそう思ったが、それ以上は口に出さず、代わりにクオヴレーに

言った。

「にしても、クオヴレーって強いよね。なんで代表じゃないの？」

「俺よりも一夏の方がふさわしいからな」

「ふさわしい？ 何で？」

鈴は不思議に思った。クラスで一番強い人が代表になるのが普通であるからだ。

「……あいつは人を惹きつけて引っ張れる才能を持っている」

（バカなほどの前向きで、どんな状況でも諦めない。多くの人々をより良く導いたアイツのように……）

「惹きつけて引っ張れるか……。そうかもね……」

それから鈴は視線を天井に向ける。それから感嘆めいた声で思い出したかのように言った。

「……でもあいつは、鈍感で……人の気も知らないで笑ってて……でも何故かそれが憎めない奴で……」

「それにあいつは、自分が無意識のうちに多くの人を救っている。それに気づいてはないがな……」

「分かるわ……その気持ち……」

「ならお前の知る一夏も、俺の知る一夏も、紛う事なき一夏だと言

うことだ」

そしてクオヴレーは踵を返す。

「お前が一夏を理解しているのなら、一夏もお前を理解してるだろう。だから伝えたい事はちゃんと伝えればいい」

(理解してる…か。一部例外があるけどそうかもね)

「ありがとう！ クオヴレー！」

「別に礼を言われることはしてないが…」

「いいのよ！ いいの！ 別に！」

そしてクオヴレーはアリーナに戻って行った。

夜

クオヴレーたちは一夏の部屋で会議を開いていた。と、言っても、相手のISも分からないため、戦法ではなく戦術についてであり、それほど時間もかからないためすぐに終わってしまった。

「それにしても、一夏さんと篠ノ乃さんって同室でしたのね」

セシリアがそう言つと、箒と一夏がそれぞれ言った。

「不本意ながらな」

「全くだぜ」

そう言う一夏を箒が横目で睨む。

その時だ、ドアがバタンツと開けられ、一人の少女が中に入つて来た。

「鈴！ お前何しに来たんだ！」

そこにいたのは鈴だった。そして鈴は笑顔を浮かべ言った。

「いやさー。篠ノ乃さんと部屋変わってあげようと思って！」

「ふざけるな！ 何を言っている！」

箒が本気で怒鳴る。鈴はそれを全く気にもしないように言った。

「篠ノ乃さんも男と同室は嫌でしょう？ それに私も幼馴染だから。ねえ！ 一夏！」

そう言つて鈴は一夏に視線を向ける。一夏は顔を引き攣らせて言った。

「俺に振るなよー」

そんな一夏にクオヴレーとセシリアは小声で尋ねた。

「一体どうしたんだ？ お前は鈴に何か言ったのか？」

「そうですね。あまりにも突然すぎます」

「て、言われてもなあ。特に何も変なことは言ってないけどな」

「お前が気づいてないだけかもしれない」

「うーん。別に他愛のない話しただけだけどな……。……。あ！ そ
ういやアイツ……。俺が箒と同室で住んでるって言うてから、なんか
様子が変になったような……」

淡々と述べる一夏を、セシリアがジト目で睨んだ。

「うん？ どうしたんだセシリア？」

「あなた、その時幼馴染みだからどうかとか言ったんじゃありま
せん？」

「ああ。確かに幼馴染みで助かったって言ったよ。見ず知らずの人
じゃ困るからな。でも、それがどうしたんだ？」

「はあ。あなたって最低ですわね」

「はあ！ 何で俺が！？」

一夏がそう言った瞬間、先ほどまで箒と言い合っていた鈴が一夏に
声を掛けた。

「ところでさ！　一夏！　約束覚えてる？」

「約束？　…ああ、あれか！　鈴の料理が上がったら毎日酢豚を…」

「そうそ」「奢ってくれるってやつか…？」「…はい？」

「だから、俺に毎日飯を御馳走してくれるって約束だろ？　いやー、一人暮らしの身にはありg」「最低！」「…へ！？」

パチンツと鈴の平手打ちが一夏の頬に飛んできた。

「あの…だな…、鈴」

「女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて男の風上にも置けない奴！　犬にかまれて死ね！」

「なんで怒ってるんだよ！　ちゃんと覚えてただろうが」

「約束の意味が違うのよ！　意味が！」

「だから説明してくれよ！　どんな意味があるんだ？」

一夏がそう言うと、鈴は顔を赤くさせ口ごもらせる。鈴の言っていることの意味が分かっている筈とセシリアは一夏を睨みつけており、分かっていないクオヴレーはどういうことかと考えていた。

「もういいわ！　じゃあこうしましょ！　来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも言うことを聞かせられる」

「おおいぜ！俺が勝つたらちゃんと説明してもらっからな」

睨みあう一夏と鈴。それから暫くし、鈴がそっぽを向いて踵を返す。

「そっちこそ覚悟してなさいよ！」

そう言い残し部屋を出て行った。

「一夏…」

「おう、なんだ？」

「馬に蹴られて死ね！」

「ですわね」

「え！？」

それから箒とセシリアは溜息をつく。そんな二人にクオヴレーが尋ねた。

「箒、セシリア。鈴の言っていた『意味が違う』ということの意味が分からないんだが…」

「「はあ」

（！？ 何故だ！？）

クオヴレー再びつく二人の溜息の理由が分からなかった。

そして時は流れ、クラス対抗戦第一試合、織斑一夏vs凰鈴音の戦いが始まることとしていた。

第七話 クラス対抗戦へ（後書き）

誤字脱字、矛盾点などがございましたら、お願いします！

次はおそらく明日になると思います！

これからもよろしくお願いします！

第八話 クラス対抗戦（前書き）

駄文だ…、改めてみると…

今回はぎりぎりセーフでした。申し訳ありません！

次回は明日中に投稿します！

第八話 クラス対抗戦

クラス対抗戦第一試合、織斑一夏VS鳳鈴音。

アリーナにはすでに赤色と黒色を基調としたIS“シエンロン甲龍”を発動させた鈴があり、観客席は生徒たちで満員になっていた。

そしてアリーナのピット内、そこにはISを発動させ出撃準備をしている一夏と、その周りで見守るクオヴレー、箒、セシリアがいた。

「一回戦から鈴が相手かよ…」

一夏がモニターに映る鈴を見てそう呟く。それからクオヴレーが一夏に言った。

「見た目と装備からしておそらく近距離型だろう。だが、所詮見た目での判断だからな、遠距離攻撃もあるかもしれない。油断はするなよ？」

「分かってるって」

そしてセシリアと箒も一夏に言った。

「特訓の成果を見せる時ですわ！」

「自分を信じる。練習の時と同じようにやれば勝てる」

一夏はそれに頷く。それと同時に放送が流れた。

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

そして一夏はピットの外へ飛んで行った。

既定の位置、アリーナの上空で一夏と鈴は睨みあった。

「今謝るなら、痛めつけるレベルを少し下げてあげるわよ?」

「そんなのいらねえよ全力で来い」

「一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、殺さない程度に痛めつけることだって可能なの」

「分かってる」

そして試合開始のコールが鳴った。

『それでは両者、試合を開始してください』

合図とともに、鈴は背中に担いである大型の青龍刀“双天牙月”を構え、一夏も雪片式型を握りビーム刃を展開させる。

そして白と赤の閃光が空でぶつかり合った。

ガキイイイイン!

雪片式型と双天牙月がぶつかり合い、金属音とともに火花が散る。

「やるじゃない一夏！ でも…！」

鈴はそう言い、武器を持っていないもう一つの手で双天牙月を展開する。

（二つ目…！）

「貰ったわ！」

それを鈴が振る直前に、一夏は雪片式型とぶつかり合う双天牙月を弾き、バランスを崩した鈴に追撃を掛ける。

「うらあああ！」

（やば！ 裏めった！）

展開した双天牙月により、体の重心とつり合いが変化。それにより態勢を立て直す時間が普段よりもかかってしまった。

そして回避できないと悟った鈴は雪片式型を双天牙月で受け止める。だが、これもギリギリの対処であり、一端態勢を立て直すため鈴は距離を取り直した。

「良いペースですわね、一夏さん」

「ああ、そうだな」

今、クオヴレーたちは千冬と真耶が観戦している部屋で共に観戦していた。

「ゴードン。お前は織斑に何を教えた？」

千冬がクオヴレーにそう尋ねた。

「俺が教えたのは、基本的な戦術と相手の隙を作る方法ぐらいです。回避、スピード、状況判断能力、それらは訓練の間に伸びていったことです」

クオヴレーはそう答えた。

「ホント、予想以上にやるわね一夏！」

「こっちも特訓して来たもんでね」

距離を取り、お互い言葉を投げ合う一夏と鈴。一夏は心の中でクオヴレーの言葉を思い出していた。

(武器を展開する時に必ず隙が生じる。クオヴレーの言った通りだ
…)

近距離戦闘において最も大切なことは隙を突く事。一夏は鈴が武器展開するのを見極め、そこを突く事により攻め入る隙を作ったのだ。それを鈴も理解した。

「でも、こっからが本番よ！」

そして鈴のISの肩部の装甲が解放、その中の球体が光り出す。

(やばい…！)

一夏は嫌な予感を感じ、回避行動を始めるが…

「遅い！」

そこから不可視の衝撃砲が発射。それが一夏に直撃した。

(あのタイミングでの攻撃は偶然で引き起こることじゃない。多分だけど、クオヴレーが隙を作る方法とかを一夏に教えたんだ。間違いない。一夏は他にも色々知ってるはず。ならもう…！)

「残念だけど一夏。もう近づけさせないよ！」

そして再び衝撃砲“龍咆”で狙いを定めた。

「衝撃砲か…」

それをモニターで見ていたクオヴレーが呟く。空間の揺れ、音、それだけで理解した。そしてそれを聞いたセシリアが言った。

「と、いうことはわたくしと同じ第3世代ということですね…」

「ああ。だがそれだけじゃない。言うだけの实力はある。鈴は一夏の攻めを見て、一瞬で俺が一夏に隙を作る方法を教えた事を理解した。接近戦に持ち込まずに戦う気だろう」

「それじゃ、一夏に勝ち目は…」

篤が低い声でそう言う。

「…………マズいな…」

(可能性はいくつかあるが…一夏が気づくかどうかだな…)

クオヴレーはジッとモニターを見てそう思った。

その頃、アリーナの空を一夏は縦横無尽で飛び回り、衝撃砲を回避していた。

「クソ！ これじゃ近づけないじゃないか！」

止まれば的になるため、動き回るしかない。だが、このままでは近づけず埒が明かないのも事実。

そして一つの選択肢にたどり着いた。

（瞬間加速で…奇襲を仕掛けるしかない…！）

チャンスは一度。見抜かれていたら一瞬で勝負がつく。虚を突いたとしても、回避されれば、また当たったとしても仕留めきれなければ、もう同じ手は使えない。そうなれば今の状態に戻ってしまう。

（失敗すれば負け…か…）

そして一夏は鈴の周りで旋回を始めた。

「そんなことしたって無駄よ！ 観念なさい！」

「悪いがそれは！ 出来ない相談だ！」

そして一夏は真っ直ぐ鈴に突撃して行く。

（バカね！ 終わりよ！）

そして鈴は一夏に狙いを定めた。

（五感を…研ぎ澄ませます！）

そして龍砲から空気を圧縮する音が響く。一夏はその音を聞き、龍砲に全神経を研ぎしませる。そして龍砲が光った瞬間、一夏は左に旋回。衝撃砲を回避する。

（避けられた！？）

（今だ！？）

そして瞬間加速で鈴に突撃する。

「うおおおお！」

だが、まさにその時…

ドゴンッ！

アリーナの上空を覆うシールドが壊され、巨大な爆音が響く。

「何だ！」

「何！？」

二人は同時に言った。

「一夏！」

「一体何が起きたの！？」

「システム遮断！ 何かアリーナの遮断シールドを貫通して来た

「ようですー！」

慌てるセシリア、箒。モニターに映し出された警告場面を見て真耶が千冬にそう言う。そして千冬はアリーナに放送を流した。

「試合中止！ 織斑！ 凰！ ただちに試合を中止しろ！」

そして千冬が放送を終えると、クオヴレーは千冬に言った。

「織斑先生、俺が行きます。ISの使用許可を出して下さい」

「無理だ。これを見る」

そして千冬はモニターに視線を向けた。

「遮断シールドがレベル4に設定…」

「しかも、扉が全てロックされて…、はっ！ あのISの仕業…」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かう事も出来ない。今現在、政府に応援要請を出すため三年の精鋭がシステムのクラッキングを始めているところだろう。遮断シールドが解除されたらすぐに部隊を出撃させる。今は待つ事しかできない」

千冬のその言葉で箒とセシリアも頷く。だが、クオヴレーだけは違っていた。

「俺が遮断シールドを壊します」

箒、セシリア、真耶の三人はクオヴレーの言葉に驚く。だが、千冬

だけは冷静に言葉を返した。

「出来るのか？」

「可能です」

そして一瞬の間を置き、千冬は答えた。

「頼んだぞ」

その頃、一夏と鈴は突然出現した黒い全身装甲のISと対峙していた。

「一夏！ 私が援護するから突っ込みなさい。武器それしかないんでしよう！？」

「その通りだ…。じゃあそれで行くか！」

そして一夏と鈴は黒いISに突撃して行く。

先制は鈴。一夏の飛び込む隙を作るために龍咆で狙いを定め、放つ。

だが、それを容易に回避し、黒いISは鈴目掛けて突撃して来た。

「な！？」

「クソ！」

一夏が瞬間加速で一気に近づき、雪片式型で斬りかかるが、それを軽やかな身のこなしで回避。黒いISは標的を一夏に変更し、拳で殴り飛ばした。

「一夏！」

そのまま地面に叩きつけられる一夏。そして黒いISは一夏に追撃を掛けようとする。

「させないわよー！」

鈴が黒いISを迎撃し、それを阻止しようとする。だが、それよりも早く黒いISは右腕のビーム兵器で鈴を狙い撃つ。そのため鈴は攻撃を中止し、回避行動に7移した。

そしてその隙に一夏も起き上がり、雪片式型を握り突撃するが、その瞬間左手のビーム兵器が一夏を襲う。

「クソ！」

一夏はそれを回避し、鈴の隣まで移動した。

「どうすんのよー！ このままじゃあいつには勝てないわよー！」

「ああ、マズいな……」

(俺のシールドエネルギーも鈴のシールドエネルギーも後僅か、本当によばい)

そもそも先ほどの戦いで両者ともエネルギーを使いすぎた。攻撃チヤンスも残されていないだろう。

そう分析していると、黒いISは全身のビーム兵器を展開させる。肩、腕、足、顔… e t c、全ての砲撃が一夏と鈴目掛けて放たれる。

「なんだこりゃ!」

「あり得ないっつーの!」

裕に10はあるその砲撃から、縦横無尽にマシンガンのように連射してくるビーム。一夏と鈴の実力でこれだけのビームの嵐を全て回避するのは無理である。

(やば!?)

(当たる)

そしてそのビームが一夏と鈴を蜂の巣にするかのように直撃した。

だが、二人の目の前にフィールドバリアが出現。それが二人をビームから守った。

「エンゲージ」

突如聞こえる声に上を見上げる一夏と鈴。そこには黒い悪魔、デイス・アストラナガンを発動したクオヴレーがいた。

「クオヴレー!」

一夏と鈴が同時に叫ぶ。それにクオヴレーは黒いISへの警戒を解かずに応えた。

「無事か？ 一夏、鈴」

「ああ！」

「あのバリアってクオヴレーの！？」

「そつだ。……あとは俺がやる。お前たちは下がっている」

そしてクオヴレーは一瞬一夏と目を合わせる。そして一夏は一回頷いて言った。

「行くぞ！ 鈴！」

「ちょ！？ 何言ってるのよ！？」

「心配すんな。あいつが負けることはないよ。それよりも俺たちが近くに居たんじゃ足手まといだ」

一夏は鈴の反論にそう答え、鈴を引つ張り後ろに下がった。

それをクオヴレーは一瞥し、それから黒いISを見つめた。

（無人機か…）

デイス・レヴは悪霊や怨霊、死霊などの負の無限力だけでなく、生き物の負の感情も力に出来る。それによりクオヴレーは黒いISに

何の感情もない、つまり誰も乗っていないことを理解したのだ。

「なら手加減はいらないな」

クオヴレーはZ・Oサイズを握り、無人機に突撃。無人機は再び全身のビーム兵器を展開するが…

「遅い！」

クオヴレーはガン・スレイヴを展開。それは縦横無尽に無人機に向かっていく。

無人機はそれを避けながらビーム兵器でクオヴレーを狙い撃つが、それをクオヴレーは軽やかに回避。そして無人機の懐に潜り込む。

「斬り裂け！」

振るわれる大鎌を無人機は回避しようとする。だが、その大鎌を振るうのと同時に、超至近距離による六機のガン・スレイヴのオールレンジ攻撃が無人機を襲う。

無人機に直撃した非実弾の雨。クオヴレーは爆煙に包まれる無人機的位置を正確に把握、そしてZ・Oサイズで斜めに切り裂いた。

「そして撃ち碎け！」

武装をZ・Oサイズからラアム・ショットガンに変更。そして…

バンッ！　バンッ！　バンッ！

至近距離から連続で無人機を撃ち抜く。それと同時に再びガン・スレイヴで迎撃。そして…

ドカンッ！

響き渡る爆発。そこにあつたのは無残に砕け散った黒い塊だけだった。

「凄い…」

それを見ていた鈴が息をのみ感嘆とした声で言う。

そして一夏は感じ取っていた。自分たちが今まで、クオヴレーの実力の片鱗しか見ていなかったという事を…。

第八話 クラス対抗戦（後書き）

無人機さん（T-T）

本当にごめんなさい。すごく短いです。

誤字脱字、矛盾点がありましたらお願いします！

今回はやっと転校生登場です！もうすぐ追いつけそうです！

本当に申し訳ありません！

第九話 貴公子（前書き）

転校生登場です。

あと、自分は原作を持っていないので、やってきるのは一人だけです。

では

第九話 貴公子

突然の無人機による襲撃。そのためクラス対抗戦は中止となり、今クオヴレーは薄暗い研究室に呼び出されていた。

その部屋には千冬と真耶がおり、中央には無残に碎け散った無人機が機械に繋がれていた。

真耶はコンピューターでそのISを調べていたが、クオヴレーがやってきたことに気づいて手を止めた。

「このISは無人機で登録されていないコアでした。世界にISのコアは467しかありません。でもこのISにはそのどれでもないコアが使用されています。ですがここまで粉々にされてしまっていますから、調べきれない事も只あります。そこで直接戦闘したゴードン君に話しを聞こうと思いましたが……」

一夏や鈴も直接戦闘を行ったが二人には荷が重い。クオヴレーの方が詳しく説明できると判断したのだ。

それを理解し、クオヴレーは静かに言った。

「聞きたいことは？」

「率直に言えば、このISについて分かったこと、気づいた事を教えてください」

(気づいたことか……)

人為的な部分だろう。クオヴレーはそう思った。いくら粉々だとはいえ、コンピューターで調べても分からない事がクオヴレーに分かるはずがない。真耶の言ったことはただの口実であり、知りたいのは無人機の性能や動作についてである事は容易に気づけた。そしてそこから、再び無人機が襲撃してきた時の対策を考えようとしたのだ。

「……動きは機械的でした。センサーで反応を察知し、的確に攻撃する。それだけではなく、攻撃を仕掛けてくる標的を優先的に狙っていました。基本セオリー通りの反応の中で、誰かが攻撃を仕掛けてきた時は、その定石が崩れています。おそらく被弾を避けるためにそう言うプログラムを作ったのだと」

定石通りに無人機が戦闘していたのなら、一夏と鈴はクオヴレーが到着する前に撃墜されていたかもしれない。

「自分が戦ってみて一番感じたのは、所詮プログラムなので動きに限界があります。そこをつけば代表候補生クラス二人もいれば十分撃退可能です」

もう一つある。それはカウンターと急襲。だが、それにはそれ相応の技術と経験が必要であり、危険が伴う行動であるためクオヴレーは言わなかった。

「そうですか…」

真耶が俯いてそう言う。それから顔を上げ、もう一つの質問をした。

「どつやって…、遮断シールドを破ったんですか？」

レベル4の遮断シールドを破ってクオヴレーは侵入した。そして圧倒的な力で無人機を鎮圧した。

真耶は危険に思ったのだ。そして同時にクオヴレー自身の事を心配していた。

力にはそれ相応の危険が伴うし、いつ政府の耳に入るかも分からない。そうなればクオヴレーはここに居られなくなるかもしれない。

その質問にクオヴレーは冷静に考えて答えた。

「……最大出力で切り裂きました」

言える限界の答えだった。レベル4の遮断シールドがどれほどのものかは分からないが、千冬たちの口ぶりか強力なものだと言う事は理解できた。

もしかしたらこのISの攻撃力では壊すことのできない代物かもしれない。だが、これ以上の説明は出来なかった。それはこの世界とは別の世界の技術の話になるからである。

「!?!? 切り裂いたって!」

(これも異世界の物質だからか…)

驚く真耶と冷静に分析する千冬。それから千冬が言った。

「ゴードンのIS“デイス・アストラナガン”のZ・Oサイズはどんなバリアも切り裂く事が出来ます。零落^{れいらく}白夜^{びやく}と似たような感じで
す」

それはでまかせである。だが、真耶は納得させざるを得なかった。だが、それだけでは真耶の不安を消し去ることはできない。千冬も真耶の気持ちは理解できた。

千冬も真耶と同じ不安を抱いた事があった。実際今も不安が全くないわけではないのだ。

だが、それは他人がとやかく言えることではない。自分で向き合っ
しかない。

それから千冬はクオヴレーに言った。

「ゴードン。もういいぞ。あとこの無人機については今は機密事項だ。決して外部には漏らすなよ」

「分かりました」

そしてクオヴレーは研究室を後にした。

それを確認した千冬は真耶に言った。

「山田先生。ゴードンの事で不安があるのは分かります。ですがゴードンの事は信じてやってください」

「はい。信じてます。…私も教師ですから！」

真耶はそう答えた。千冬は微かに微笑み、それから薄暗い天井を見上げる。

(それにしても、ゴードンの実力があれほどだとは…)

千冬はクオヴレーと無人機の戦闘を思い出す。それには寒気すら感じた。

そしてクオヴレーがすでに自分と同格クラスのIS操縦者であるという事を実感した。

翌日のSHR。

教壇に立つ真耶が生徒たちを見渡して言った。

「今日はなんと！ 転校生を紹介します！」

そして教室のドアが開かれ、金色のブロンドの髪を後ろで結んだ“少年”が中に入ってきた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さんよろしくお願いします」

微笑みながらそう言うシャルル。それは貴公子と言っても差支えないほどの笑みだった。

「お、男…?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」
シャルルがそう言つと…

きゃ…きゃああああー!!!

女子たちの黄色い歓声が上がった。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ まもってあげてくなる系の！」

騒ぎ出す女子たち、それを千冬が一掃した。

「騒ぐな！ 静かにしろ！」

そして教室は一気に静まり帰った。

「今日は2組と合同で実習訓練を行う。各人は着替えて第二グラウンドに集合。それから織斑、ゴードン。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。では解散！」

千冬の説明が終わり、クオヴレーと一夏はシャルルとともに更衣室に移動した。

途中で女子生徒たちに追いかけられ、走って逃げたため、クオヴレーと一夏は平気だったがシャルルは息を切らしていた。

「はあはあ…、ごめんねいきなり迷惑かけちゃって」

息を整えてシャルルがそう言った。

「いいって。それより男子が増えてよかったよ。俺たち二人しかいなかったからな。俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

「俺はクオヴレー・ゴードンだ。俺の名前を呼ぶ時もクオヴレーで構わない」

「うん。よろしく。僕の事もシャルルでいいよ」

それからクオヴレーと一夏は服を脱いで着替え始める。シャルルは顔を真っ赤にし、目を隠して後ろを向いた。

「？　どうかしたのかシャルル？」

「早く着替えないと遅れるぞ」

「う、うん。き、着替えるよ。でも、その、あっち向いてて」

(何故動揺しているんだ？　まあいいか…)

「いや、まあ、着替えをジロジロ見る気はないが…」

そして二人は後ろを向く。それから僅から秒で声が聞こえてきた。

「着替えたよ」

振り返る先にはISスーツに着替えているシャルルがいた。

「着替えるのちょうはやいなあ…。なんかコツでもあるのか…？」

(ありえない。明らかに人間の着替えの速度を超越している)

その着替えの早さに二人は驚いた。

第二グラウンドに集まった生徒たち。その生徒たちに、白いジャージを着用した千冬が言った。

「本日より実習を始める。まずは戦闘を実演してもらおう。嵐！ オルコット！ 専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出ろ」

二人は面倒臭そうに前に出て行った。

「それで対戦相手だが…」

千冬がそこまで言うと、空から絶叫が聞こえてきた。

「きゃあああ！」

その声で皆が一斉に空を見上げる。そこにいたのはダークグリーン色のISを装着した真耶。そして真耶は一夏目掛けて真っ直ぐ突っ込んで来た。

「どいてくださーい！」

クオヴレーは真耶がISを制御できていない事を理解した。

そしてISを発動させ、一気に空を掛ける。

周りに旋風が巻き起こり、風を裂いて飛んで行く。

そしてクオヴレーは突撃する真耶を受け止め、それから宙に舞った。

「!?!? あ、あの…!! ゴ、ゴードン君!?!」

「大丈夫ですか？」

クオヴレーは抱きかかえている真耶に向かってそう言う。真耶は顔を赤くした狼狽していた。

「わ、私は大丈夫です…! だから、もう離しても平気です」

そう言われクオヴレーが真耶を離すと、真耶はゆっくりと地面に着陸した。

それを見ていた千冬は、セシリアと鈴にしかめっ面で言った。

「お前たちの相手は山田先生だ。とつとと始めるぞ」

「え？ 二対一で？」

「さすがにそれは……」

セシリアと鈴が意見する。それに千冬は余裕の笑みを浮かべて答えた。

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その言葉にムツとする二人。千冬は真耶を一瞥し、準備が整ったのを確認した。

「では！ 始め！」

そしてそう宣言した。

空で対峙するセシリア、鈴と真耶。一番初めに動いたのはセシリアだ。

「行きますー！」

ブルー・ティアーズを四機展開。真耶に向かってレーザーを放つが、真耶は縦横無尽に旋回、それを回避する。

そして鈴は、空を動き回る真耶に狙いを定め、衝撃砲を放つ。

真耶はそれを左腕のシールドで防いだ。

それを下で見ているクオヴレーは、冷静に戦況を分析していた。

（これがIS学園の教師か…、操縦者としての実力も高いが、それ相応の経験もある。二人の勝ち目は薄いな…）

そもそもあの二人にはチームワークの欠片もない。各自が勝手な判断で適当に攻撃しているだけである。それでは逆にお互いが足を引っ張り合う事になりかねない。

そんな時、千冬は自分の後ろにいるシャルルに言った。

「デュノア。山田先生の使っているISの解説をしてみせる」

「あ、はい！」

クオヴレーは考えるのを止め、シャルルの説明に耳を傾けた。

「山田先生のISはデュノア社製“ラファール・リヴァイヴ”です。第二世代開発再興機の機体ですが、そのスペックは初期第三世代にも劣らないものです。現在配備されている量産ISの中では、最後発でありながら、世界第三位のシェアを持ち、装備によって、格闘、射撃、防御といった全タイプに切り替えが可能です」

そうシャルルが説明を終えた瞬間：

ドカンッ！

空中でグレネード弾が爆発する音が響き、煙の中からセシリアと鈴が落ちてきた。

「あんだねえ！ 何面白いように回避先読まれてんのよ！」

「鈴さんこそ！ 無駄にバカスカと撃つからいけないのですわ！」

落下により発生したクレーターの中で二人は取っ組みあっていた。

「これで諸君にも教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持つて接するように」

着陸する真耶の所まで行き、千冬はそう言う。それからすぐに次の指示を出した。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事、では分かれる！」

そして生徒たちはそれぞれのグループに分かれた。

第九話 貴公子（後書き）

誤字、脱字がありましたらお願いします！

次回もよろしくお願いします！

第十話 ルームメイト（前書き）

やっと十話…

追いつくまであと三話です！

みなさん本当に申し訳ありません！そしてありがとうございます！

第十話 ルームメイト

その後のグループ演習を終え、クオヴレー、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルは学園の屋上で食事を取っていた。

「どうということだ」

箒が機嫌悪そうにそう言う。クオヴレーは話の内容が掴めていなかったため、何故箒が機嫌を悪くしているのか分からなかった。

「大勢で喰った方がうまいだろ？ それにシャルルは転校してきたばっかで右も左も分からないだろうし」

そして一夏がそう言う。それでクオヴレーはある程度の話の流れを掴んだ。最も箒の機嫌が悪い理由までは分からなかったが。

「えっと…、ホントに僕も同席して良かったのかな？」

と、そう考えていると、クオヴレーの隣に座るシャルルがそう言った。

「別に気にしなくていい」

「そつだ。男同士仲良くしようぜ」

クオヴレーと一夏がそれぞれそう言う。それからシャルルは微笑んでお礼を言った。

「ありがとう。クオヴレー、一夏。二人とも優しいね」

クオヴレーはフツと頬笑み、一夏は少し照れた様子だった。

「なーに照れてんのよ」

それに気づき、鈴がそう言う。一夏は慌てて言葉を返した。

「べ、別に照れてねえぞ」

それでも鈴は不審な視線で一夏を見つめるが、すぐに気を取り直し、手に持つ弁当箱のふたを開けた。

「おお！ 酢豚だ！」

「そう。今朝作ったのよ。食べたって言うてたでしょ？」

「ああ、サンキューな」

そう言って一夏は鈴の弁当に箸をつけた。

「うん。うまい！」

「そう！ よかったあ！」

鈴がそう言う。箸はそんな鈴に対抗しようと言った。

「い、一夏！ そ、その、私も作ってきたのだが」

その声に振り向く一夏。箸の膝の上には手の込んだ作りのした弁当が置かれていた。

「おお！ うまそうだな！」

一夏が叫ぶ。箸は目を閉じそっぽを向いた。

「言っておくがついでだからな。私が食べるために時間を掛けて作ったものだ」

「そうだとしても嬉しいぜ。箸、ありがとう」

そう言つて一夏は箸の弁当に手を伸ばす。そして唐揚げを一つ掴み、口に運んだ。

「うん！ うまい！ これって結構手間がかかってないか！？」

「味付けは生姜に醤油、おろしニンニク、それと予め胡椒を少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

清々しい顔で箸が一夏にそう答える。それを鈴はグーツと睨んでいた。

「なんか、大変そうだね…」

「そうか？ 俺には楽しそうに見えるが…」

それを遠くから見ていたシャルルとクオヴレーがそう言う。

そんな時、クオヴレーはセシリアがバスケットからサンドイッチを取り出しているのが目に入った。

「セシリアはサンドイッチか？」

「はい。今朝作ってみましたの」

「へえ。おいしそうだねえ」

「ああ。そうだな」

二人は素直に感想を述べる。セシリアとしてもそう言われる事は嬉しかった。

「よろしければ、お一つどうぞですか？」

「え？ いいの？」

「ええ。作りすぎてしまいましたし」

「ありがとう」

「言葉に甘えさせてもらおう」

そして二人は卵サンドを一つずつ手に取った。

（それにしても、随分丸くなったな）

クオヴレーはそう思った。

以前までのセシリアならこんな事はありませんなかつただろう。これはクオヴレーの影響によるものだが、クオヴレー本人は自覚していなかった。

そしてクオヴレーはサンドイッチを一口齧った。

(!?)

一瞬にして空気が変わった。

(何だ…これは?)

何故卵サンドにバニラエッセンスが入っている。異常に甘いというよりも、そもそも卵とバニラエッセンスが合うはずがない。クオヴレーは横目で同じサンドイッチを食べたシャルルを見る。シャルルは顔を青くし、こちらに視線を向けてきた。

そんな二人を意に介した様子もなく、セシリアは語り始めた。

「たまにはこういうのも悪くないと思って作ってみましたの。それで、お味の方はいかがでした?」

セシリアが目を輝かせて尋ねる。よほど自信があるようだ。

「…悪くない」

「…お、おいしかったよ」

クオヴレーは表情に出さなかったが、シャルルはかなり冷や汗をかいていた。

「そつですか!」

セシリアは満足そうに頷いた。

（一体どうやって作ったのかは、聞かないでおこう）

クオヴレーは心の中でそう思った。

それから授業と夕食を終え、クオヴレーはベットに腰をおろしていた。

その時、部屋の扉がコンコンとノックされる。

誰だ？そう思いながらクオヴレーは扉を開ける。そこにいたのは真耶とシャルルだ。

「山田先生？ 一体どうしたんですか？」

「あ、はい。今日からゴードン君はデュノア君と一緒に部屋に住んでもらうことになりました。男子同士ですし、部屋も空いていますから」

クオヴレーの質問に真耶がそう答える。その答えにクオヴレーは疑問を持った。個人的判断ではあったが、クオヴレーが一人部屋の理由は、素性の知れない人間と誰かを相部屋にするのは危険だからである。

最も、それぐらいの信頼はおけるようになった、そう言えば一言で解決してしまうが。

そう考えているクオヴレーにシャルルが言った。

「どうかしたの？」

ハツとし、クオヴレーは首を振る。

(これ以上考えても仕方ないな)

「いや、何でもない。これからよろしく頼むぞ、シャルル」

「うん！」

満面の笑みを浮かべてそう答えるシャルル。

それからすぐにシャルルの引越し作業が始まった。

それから暫くし、シャルルの引越し作業は終了した。

「ふう、やっと終わった」

シャルルが一息ついてそう言う。そんなシャルルにクオヴレーが言った。

「ああ。そうだな」

そしてクオヴレーは立ち上がる。

「何か飲むかシャルル」

「え？ あ、うん！ ありがとう！」

そしてクオヴレーは一夏から貰ったお茶を持ってきた。

「これは？」

「？ 緑茶だが、知らないのか？」

「あ、うん。見たことは何回かあるけど」

それを聞いて、クオヴレーは心の中で相槌を打つ。ヨーロッパでは紅茶が主流であるのだ。そしてクオヴレーはシャルルに言った。

「紅茶の方が良かったか？」

「いやいいよ！ 一回飲んでみたかったから！」

そう言いながら、クオヴレーの手に持つ湯のみを受け取った。

「これが日本のお茶か？」

それからゆっくりと口に含んだ。

「紅茶とは随分違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「そうか、よかった」

クオヴレーは涼しい顔で答え、椅子に腰を下ろした。

「そう言えば、クオヴレーは放課後に一夏とISの特訓をしているって聞いたけど、そうなの？」

突然シャルルがクオヴレーに尋ねた。

「ああ。最も俺は鍛えている立場だが」

「へえ…、て、ことはクオヴレーってIS上級者なわけだね」

シャルルは納得したかのように言う。シャルルがクオヴレーのISを見たのは、クオヴレーが真耶を助けたほんの数秒だけである。そんな短時間ではあるが、クオヴレーの実力を理解するには十分な時間だった。

一瞬でISを展開させ、空を切り、目にも止まらぬ速さで宙を舞う。その卓越された動きはまさに百戦練磨であった。

だからこそ、次の言葉はシャルルを驚愕させるものだった。

「いや、俺はまだ初心者だ」

「ちよ！ 初心者！？」

「ああ、俺はISを使い始めてまだ一月も立っていない」

驚愕するシャルルに、クオヴレーは冷静に言葉を返す。

「一か月もたつてないって…。凄いなだね。クオヴレーは…」

そう呟き、シャルルは意を決したように言った。

「…あのさ、放課後の特訓、僕も一緒に加わっていいかな？ 専用機もあるし、一夏の特訓にも役に立てると思う。それに、クオヴレーを見てたら色々と勉強になりそうだから」

「それは構わないしありがたいが、俺を見ても学べるところなんてないぞ？」

「そうかな？ そう思ってるのはクオヴレーだけだと思うよ」

「？ そうなのか？」

自分が見本に慣れるような存在ではないと思っていたクオヴレーにとってシャルルの言った事は理解しがたい事であった。

そんなクオヴレーを見て、フフフとシャルルは笑った。

「？ 何か面白い事でもあったか？」

「ううん。別に何でもないよ」

(まあいいか…)

それからクオヴレーは時計を一瞥する。時刻はすでに8時を回って

いた。

「そつだシャルル。シャワーの順番はどうする」

「僕は後でいいよ」

「そつか。なら先に使わせてもらおう」

それから順番にシャワーを浴び、他愛もない話しをして今日一日は終わりを迎えた。

翌日

朝のSHR、教室の中はざわついていた。

「えつと、きよ、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、クラスにお友達が増えました」

生徒たちのざわめきの正体、その視線に映るのは教壇に立つ真耶とその隣に立つ眼帯をつけた銀髪の少女。

（転校生、昨日の今日でか？）

クオヴレーは疑問に思う。それは他の皆も同じであり、教師である

真耶も同じ面もちであった。

だが、クオヴレーが抱いた疑問はそれだけではなかった。その銀髪の少女が纏うオーラ、身のこなし、勘ではあるが、他の生徒たちとは違う、軍人が醸し出すそれを少女は持っていた。

「ドイツからの留学生の、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

「挨拶をしる、ラウラ」

千冬がラウラにそう言う。ラウラは千冬に視線を向けて言った。

「はい、教官」

(教官…か…、なるほどな)

千冬の事を詳しく知っているわけではないが、二人がどういう関係なのかを理解するのは容易だった。

それからラウラは千冬から視線を戻し、自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラが口にした言葉はそれだけだった。

「…あの、以上…ですか？」

真耶がラウラに尋ねる。それにラウラは「以上だ」と即答、それから一夏を睨みつけた。

「貴様が…」

そう呟き、一步一步一夏のもとに近づいて行く。

そしてラウラはその右腕を振り上げた。

「やめる。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

それをラウラは頬に振り下ろそうとするが、突然の手に手を止める。

そして生徒たちの視線は一番後ろの左端の生徒に向けられた。

「何だ貴様は…」

「クオヴレー・ゴードンだ」

ラウラも感じ取った。この生徒たちの中で明らかに違うその雰囲気。クオヴレーが自分と同種の間人であると言う事を。

「貴様に命令される覚えはない」

「命令した覚えはないがな」

睨みあうクオヴレーとラウラ。一触即発、まさにそう言う空気だった。

「やめる。二人ともだ」

その間に千冬が入る。ラウラは仕方なく振り上げた手を下ろした。

（織斑一夏…、私は認めない。貴様があの人の弟であるなどと…。認めるものか…！）

そしてラウラは一番後ろの席、クオヴレーの斜め後ろの席に座った。クオヴレーはラウラを横目で一瞥し、それから一夏、千冬と視線を向けた。

（ラウラ…ボーデヴィツヒか…）

第十話 ルームメイト（後書き）

ラウラ登場です！

そしてクオヴレーと千冬ねえさんの絡みがない（殴っ！

ラウラ関係で絡ませる予定です！申し訳ありません！

誤字脱字、矛盾点がありましたらよろしく願います！

次回もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3892y/>

IS～舞い降りる虚空の使者～

2011年11月17日22時11分発行